

遠征隊行動経過

- 9/16 先発隊離日
- 23 後発隊離日
- 25 テリー出発
- 26 ウツタルカシ着
- 30 ガンゴトリよりポーター44名とともにキャラバン開始
- 10/4 B.C.(4600m) 設営
- 8 C1.(5200m) 設営
- 9 南西稜ルート工作開始
- 14 C2.(5800m) 設営
- 19 C3.(6000m) (アタックキャンプ) 設営
- 21 第一次登頂(工藤哲靖、坂井忍、宮本真)
- 22 第二次登頂(河合範雄、岡島伸浩)
- 23 第三次登頂(藤原章生、樋口和生、高原昌也)
- 24 キャンプ撤収、B.C.へ下山
- 27 B.C.を撤収し、ガンゴトリへ下山
- 31 ウツタルカシ出発、深夜テリー帰着

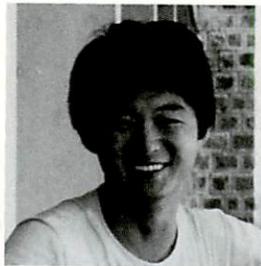
隊員

宮本 真(23)

理学部化学第二学科3年

Member

Makoto Miyamoto



隊員

高原 昌也(21)

教養部2年

Member

Masaya Takahara



隊員

岡島 伸浩(19)

教養部2年

Member

Nobuhiro Okajima



隊員、医師

河合 範雄(31)

札幌医大研修医

Medical Doctor

Norio Kawai



インドヒマラヤ スタルシャン・パルバート (6507M) 登頂報告書

THE FIRST ASCENT OF SUDARSHAN PARBAT FROM THE SOUTH-WEST RIDGE



夕映えのスタルシャン・パルバート

ごあいさつ

北海道大学山岳部インドヒマラヤ遠征隊は、先般来、インドヒマラヤ・ガンゴトリ山群にそびえるスタルシャン・パルバート峰の登頂をめざし、鋭意登攀を行ってまいりましたが、昭和59年10月21日より23日にかけて8名の隊員全員の登頂に成功いたしました。このたびは無事帰国いたしました。これは同峰の前人未踏の南西稜からの初めての登頂であります。この成果は、北大山の会々員をはじめ、学内外の関係各位のあたたかいご支援のたまものであり、ここに遠征のご報告をするにあたり、厚くお礼申し上げます。

北海道大学山岳部部长 杉野目 浩

隊員



隊長

工藤 哲靖(25)

北大文学部卒

Leader

Tetsuyasu Kudo



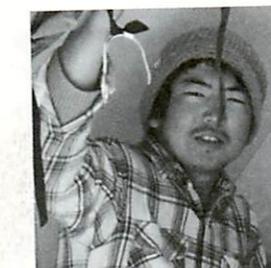
副隊長

藤原 章生(23)

工学部資源開発工学科3年

Assistant Leader

Akio Fujiwara



隊員

坂井 忍(24)

工学部建築工学科修士1年

Member

Shinobu Sakai



隊員

樋口 和生(22)

農学部畜産学科3年

Member

Kazuo Higuchi

L-5
北大山岳館

北海道大学体育会山岳部
インドヒマラヤ スタルシャン・パルバート遠征隊 — 報告書

発行者 杉野目 浩(山岳部部长・北海道大学工学部教授)

発行所 北海道大学体育会山岳部

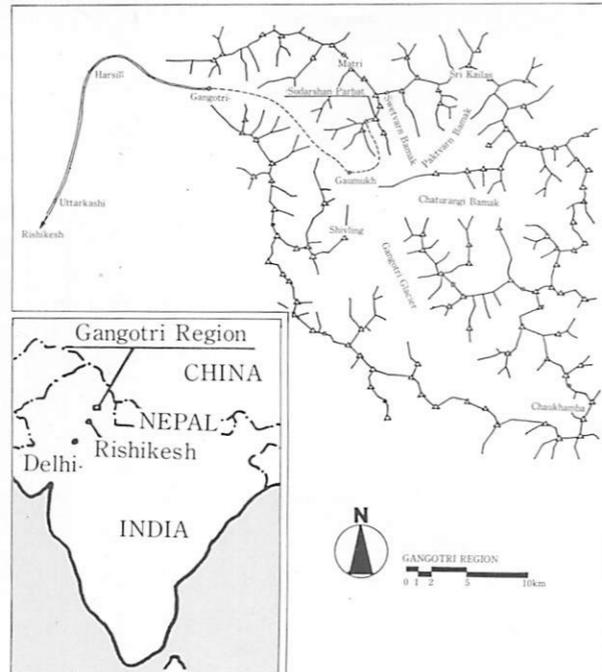
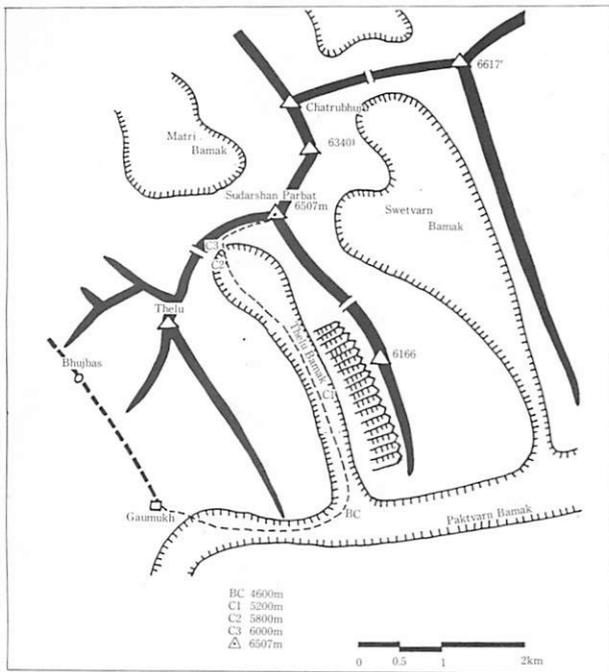
札幌市北区北17条西7丁目(新サークル会館内)

※この報告書の文章、写真などの無断使用を禁じます

北海道大学体育会山岳部

Academic Alpine Club of Hokkaido - 1984

L-5



登頂記

10月21日、最後のルート工作に出発した。残されていたのは、雪稜の終了点6300m付近から、頂をさえぎるように突立っている岩壁と、それに続く岩稜、そして頂上直下まで続くであろう急傾斜の雪面。一日でカタをつけるには少量が多いように思えた。その上6500m近い高度でアイゼンを着用しての岩登り。はたして自分達にそれができるかどうか、不安は尽きない。上部岩壁だけは今日中というたてままと、行けるものなら頂上まで行ってしまえという本音。決めかねるままに最初のアプミに手をかけた。

岩壁の基部で残された工作資材いっさいがっさい身につけると、腰や胸はハーケンやカラビナでずっしりと重くなる。1ピッチ2ピッチとザイルを延ばす毎に体が少しずつ軽くなり、それが幾分でも頂に近づいた証になる。

ほぼ垂直に切り立った正面の岩壁を避け、内院側にルートを延ばす。壁に太陽をさえぎられ、うすら寒かった取り付きから、岩の小尾根を越え、南面のテラスへ出るとい



頂上に立つ藤原君

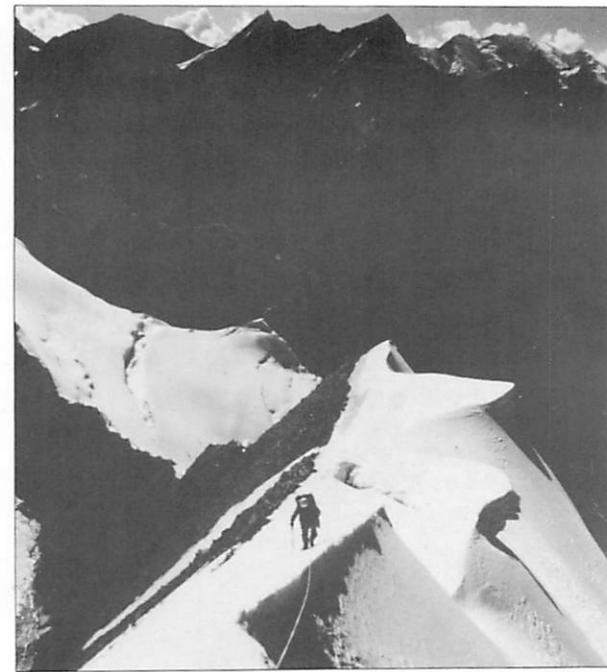
きに陽を浴びる。C2がほとんど真下に見える抜群の高度感である。ひとかかえもふたかかえもある岩が到る所でぐらつきながらもかろうじて崩壊を免れ、稜線上に積み重なっていた下部岩稜にくらべ、この岩場は安定していた。大ざっぱなホールド、スタンスに思い切って身を任せ強引に越えて行く。

岩壁の頭に出てようやく先のルートが見渡せた。空身でトップをリードする宮本が何個目かの岩の高まりを越えようとしたとき、振り向きざま青空にこぼしをかざした。白い歯がこぼれていた。ピッケルを振って答えザイルをたぐって行くと、頂に続く雪稜が白く輝いてまっ先に目に入った。足許からそこに続いている岩稜は、既に稜と呼ばれるにはおこがましい、内院側にゆるく流れる太い岩尾根だった。勢いづく宮本をさらにけしかけ、トップを走らせる。頂はもう手の届きそうなところで青空に接していて、明日またここまで登ってくるなどんでもないことのように思えた。60mのザイルを2本、いっばいに延ばすと前と後ろでは何を叫んでいるのかさっぱりわからない。宮本が派手にピッケルを振り回し合図する。ザイルをぐいぐいひっぱり、浮き石を蹴落しながら追いつく。真下に見えるC2では、もう豆つぶ大にしか見えない隊員達が、時折思い出したように動き回っていた。

最後の雪壁に取り付いたが、思うようにザイルが延びて行かない。もたつく宮本を見守っていると、アイスハンマーまで取り出してアイゼンの前爪を蹴り込みだした。雪面の下にはやはり蒼水が隠れていた。しかし、ダブルアックスなど見よう見まねの技がこんなところでどうなるというのだ。「カッティングだ。カッティングしろ。」思わず叫んでしまう。我にかえった宮本がようやくスタンスを切り出し始めた。落ち着きを取り戻したのか、下をのぞき込むように私達を見おろした宮本はエヘヘなどと恥ずかしそうに笑みを見せ、今度はアイスハンマーをしまい込み、ピッケル一本で、ややガニ股気味に登り出した。アイゼンの爪を全部雪面に食い込ませ、バランスよく登る。そう、始めてアイゼンを着けた時最初に教わる登高法だ。余裕があるかに見えた宮本も、頂を間近かにし、あっというまに過ぎ去った時間にあせりを感じ、まさに浮き足立っていた。おそらく後



標高6100m付近の岩場



上部岩壁へ続く稜線

ろの二人も同じだったろう。

ようやくのことで頂を囲む平らな雪面に出た時、陽はとつと傾き、見おろすC2は、既にスダルシヤンの衛星峰であるテルーの陰影の中に深く沈んでいた。頂は、雪面のかたすみのほんの数メートルの雪の高まりだった。

午後4時20分、まず宮本が、そして私が、数分遅れて坂井がやってきた。重い体をほんとうに重そうに登ってきた。C3の食糧袋の中で、おそらく、ラーメンやビスケットの下でくしゃくしゃになっているエーデルワイスの部旗のことを話すと「エーツ」と宮本。「登れりやそれでいいだろ？」となだめすかし、あとはほおっておく。坂井を迎えようやく三人そろって頂に立った。握手をしてみるものなぜか照れ臭さが先にたつてきこなくなってしまう。しかし、それにしても何とも言いようのないヒマラヤの素晴らしい眺め。ほんの数メートル登っただけでも頂とそうでないところの展望には格段の差があった。昼間あれ程白く強烈に輝いていた山々も、淡い落ち着いた輝きに変わりつつあった。この小さな雪の高まりにも、黄昏が迫っていた。

坂井がポケットから小さなカメラを取り出しゼンマイを巻く。自動巻き上式カメラに変わりはなかったが、フィルムが切れんばかりに大袈裟な音をたて笑いを誘う。

午後4時30分、既に淡いピンク色に染まりだした頂を後にした。振り返ると、ほんの数分居ただけなのに、交錯した三人の足跡は、まるで大騒ぎでもしたかのように小さな頂いっばいに広がっていた。まぶしい程に燃え始めたアーベントロートの中、長くつらい下山が始まった。(T.K.記)



ベース・キャンプにあらわれたアイベックス

●会計報告

(単位:円)

項目	国内	国外	小計
〈収入〉			
隊員個人負担			3,044,259
寄附			2,808,640
雑収入			78,000
計			5,930,899円
〈支出〉			
渡航費	1,989,720		1,989,720
輸送費	772,850	468,250	1,241,100
装備費	204,090	32,592	236,682
食糧費	58,072	98,175	156,247
代理店経費	88,200		88,200
ポーター等雇用費		277,410	277,410
国外滞在費		606,837	606,837
登山料	171,250		171,250
隊員保険料	198,240		198,240
事務・通信費	300,000	45,213	345,213
報告書作成費	620,000		620,000
小計	4,402,422	1,528,477	5,930,899円
支出総計			5,930,899円

SUDARSHAN PARBAT

スダルシャン・パルバート(6507m)
登頂報告書

1 9 8 4
北海道大学山岳部

Academic Alpine Club of Hokkaido

SUDARSHAN PARBAT

スダルシャン・パルバート
登頂報告書

夕映えのスダルシャン・バルバート（ガンゴトリから望む） Sudarshan Parbat in the late afternoon seen from Gangotri





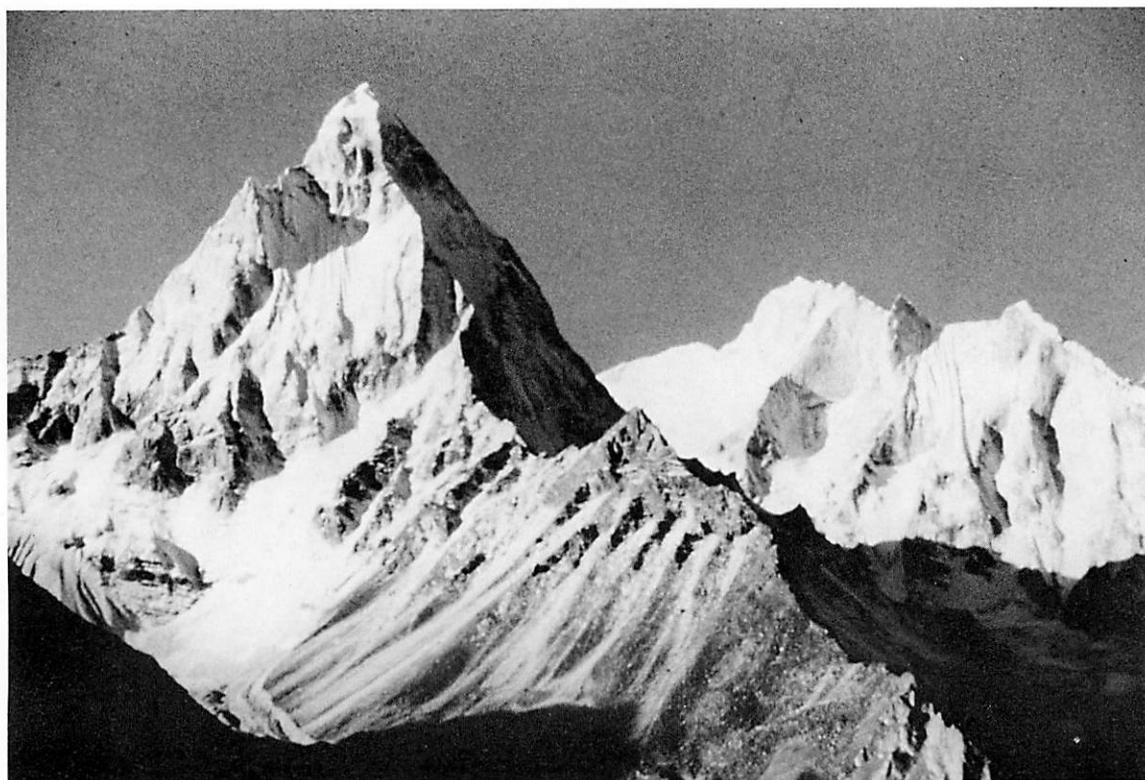
夕暮れの第二キャンプ (5,800 m 付近) Evening at Camp 2 (5,800 m)



スダルシャン内院 (5,600 m 付近) を行く Crossing the Thelu glacier (5,600 m)



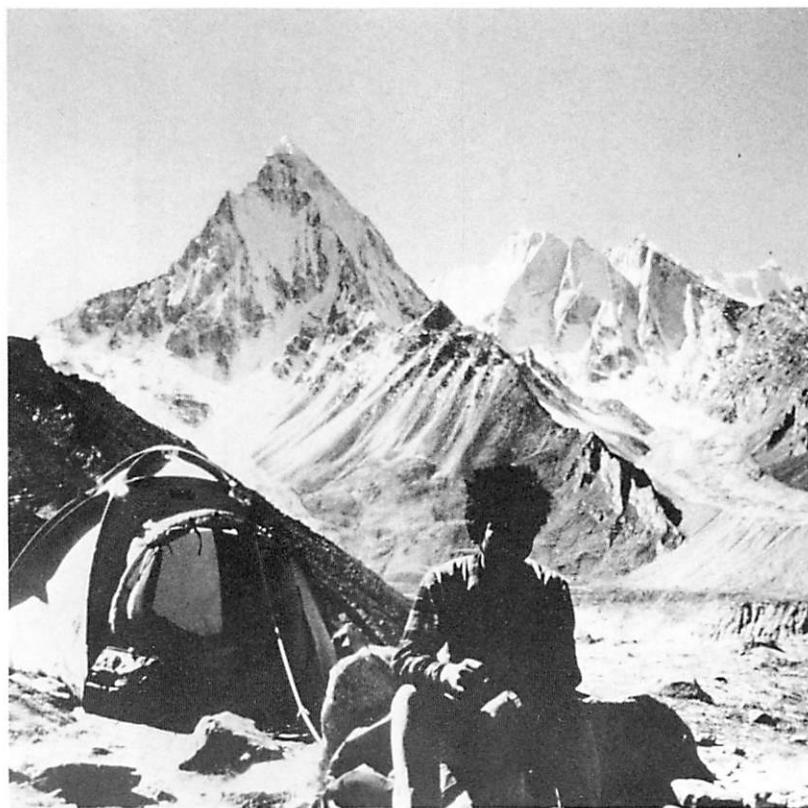
キャラバン中、羊の群れに立往生 A flock of sheep holds up our coach



ベースキャンプから望むシブリン峰 (6,543 m) Mt. Shivling (6,543 m) seen from the base camp



ベースキャンプ (4,600 m 付近) の全景 The base camp (4,600 m)



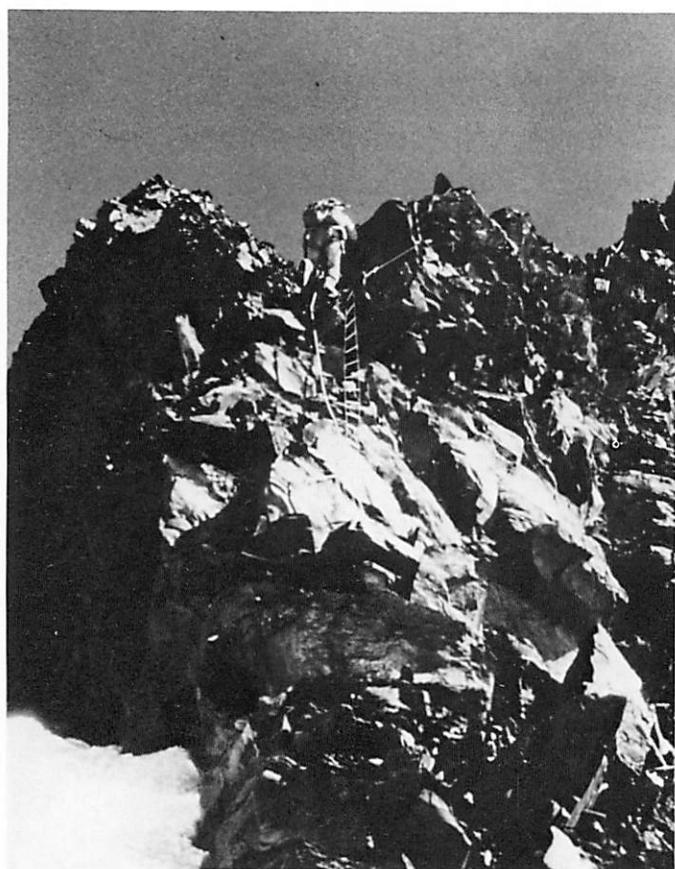
ベースキャンプでくつろぐ岡島隊員 At the base camp with Mt. Shivling in the distance



岩稜のトラバース (6,200 m 付近) Traversing a rocky ridge (6,200 m)



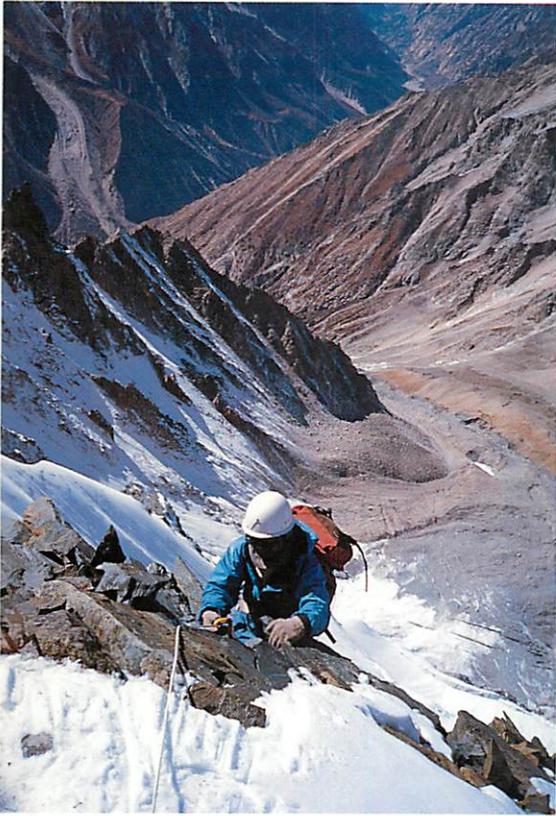
ザイルが絡まっちゃった (高原隊員) Struggling to unravel an entangled rope



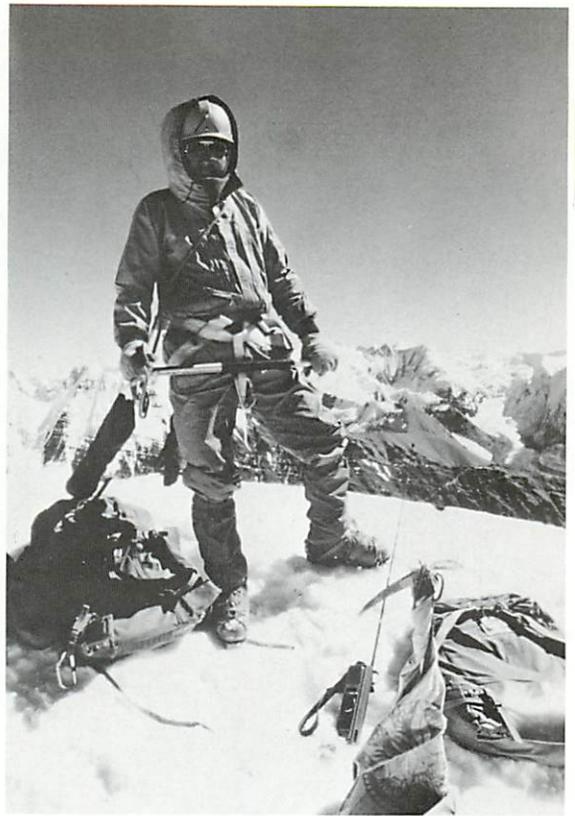
6,050 m 付近の難場を越える Climbing a rocky ridge (6,050 m)



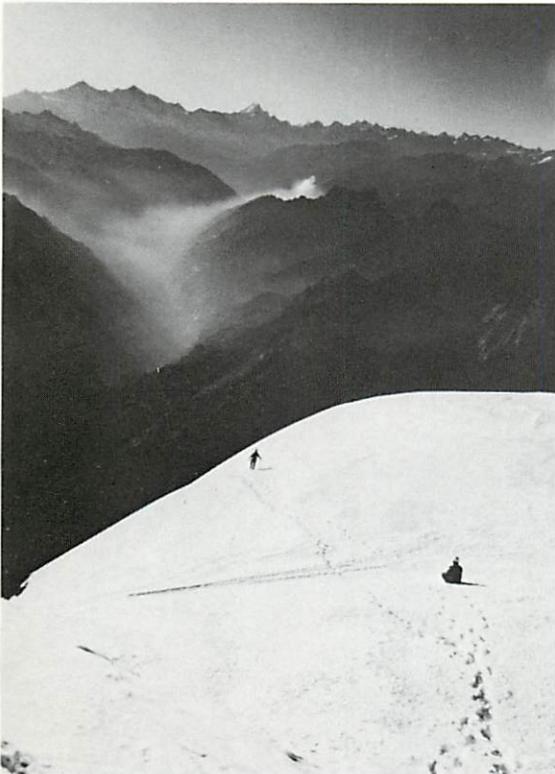
6,250 m 付近の雪稜 Climbing up a snow ridge at a height of 6,250 m



登攀 (6,150 m 付近) Climbing the southwest ridge
at a height of 6,150 m



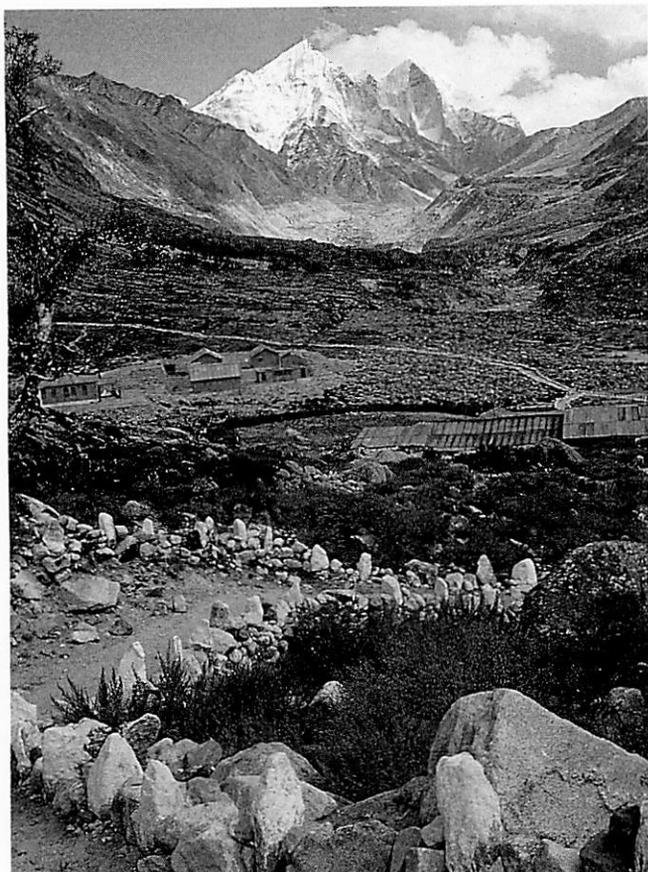
頂上に立つ藤原隊員 Mr. Fujiwara, an assistant leader,
on the summit of Sudarshan Parbat



登頂を終えて (頂上から南西を望む) A view towards
the southwest from the top of Sudarshan Parbat

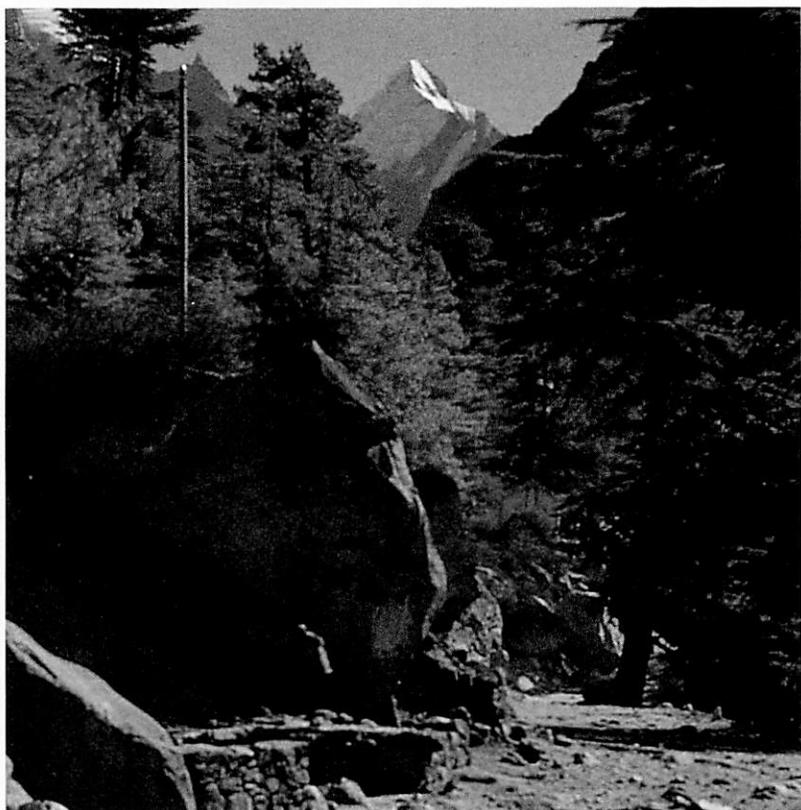


BCに集まった隊員とポーター The expedition members
and porters at the base camp



ボジュバザ(3,800 m)のアシュラム(修道場)
—背後はバギラティ峰—

At Bhujbas (3,800 m) with Mt. Bhagirathi
in the distance



ガンゴトリから望むスダルシャン

Sudarshan Parbat seen from Gangotri

序	北海道大学山岳部長 杉野目 浩	9
1. 遠征計画と遠征隊の成立		10
スダルシャン・パルバート峰について		
2. 隊員の構成		14
3. 遠征隊日誌		15
4. 登攀概要	アシスタントリーダー 藤原 章生	17
5. 記 録		
A) 札幌発——インド	隊 員 藤原 章生	20
B) 出発～デリー到着	隊 員 高原 昌也	21
C) デリーからベースキャンプ (4,600m) へ		
	隊 員 岡島 伸浩	22
D) ルート工作	隊 員 宮本 真	24
E) 登 頂	リーダー 工藤 哲靖	28
F) 撤収から解散まで	隊 員 坂井 忍	30
6. 遠征断章		
カシミール紀行	隊 員 樋口 和生	35
思い出すままのインド	隊員・医師 河合 範雄	37
7. 資 料		
A) 装 備	隊 員 高原 昌也	39
B) 食 糧	隊 員 宮本 真	42
C) 渉 外	隊 員 樋口 和生	46
D) 医 療	隊員・医師 河合 範雄	47
E) 会 計	隊 員 坂井 忍	52
8. ご協力者芳名録		53
○遠征隊留守本部		54

序

SUDARSHAN PARBAT

北海道大学山岳部部长 杉野目 浩

昭和59年10月21日から23日にかけて、わが山岳部インドヒマラヤ遠征隊は、ガンゴトリ山群にそびえるスグルシャン・パルパート峰の登頂に成功した。8名の隊員全員による同峰未踏の南西稜からの初めての登頂であった。私は、9月中旬、隊を送り出してから、成功は確信していたものの、8名の隊員のうち6名までがヒマラヤ未経験者ということもあり、大変気がかりで、11月5日、山麓の村であるウツタルカシから快挙を伝える電報がとどいた際は、非常に嬉しかった。

今回の遠征計画は、昭和58年秋頃より、当時の主任幹事藤原章生君や冬期グウラギリI峰遠征に加わった経験を持つ工藤哲靖君を中心とする現役部員によって進められた。グウラギリ遠征の経験を次の世代へと継承し、現役部員のヒマラヤ経験者を増やしたいという部員の熱意から生まれた計画であったが、何分にも、隊員候補者の大部分がヒマラヤ未経験の若い部員であり、私は、計画を進めるにあたって、特に慎重を期すことを求めた。立案の過程で、在札のグウラギリ遠征隊員、ヒマラヤ経験者に、数回にわたってお集まりいただき、計画を詳細に検討願い、最後に、59年5月10日開催の海外遠征委員会において慎重なご審議を得て、一部を修正の上、最終計画を承認いただいた次第である。

これまでに現役部員が隊員として参加したOB主体のヒマラヤ遠征は数多いが、現役部員が主体となつてのこのたびの海外遠征は、1972年のアラスカ・マッキンレー峰、1978年のカラコルム・ドレフェカル峰、1979年のカラコルム・クンヤンチッシュ北峰遠征に次ぐものである。

遠征の資金については、ライトエクスペディションとは云え、隊員の個人負担には限度があることを認めざるを得なかった。費用の一部は、報道関係の後援をいただいままかなうことができたが、学内外からの寄金を募ったグウラギリ計画直後のこともあり、これ以上の資金は外部に頼らず、不足分は、山の会会員の寛大なご支援をお願いする方針とした。幸いにも朝比奈山の会会長をはじめとする山の会会員各位の暖かいご支援を得て、多額の寄金が集まり、順調に計画を進めることができた。また、上記のような方針にもかかわらず、企業各社からは、食糧、装備の一部など現物寄付の形で、多額のご援助をいただいたのはありがたいことであった。

今回の遠征の成功は、以上のように、学内外の多数の方々のご厚情、ご支援の賜であり、ここに遠征のご報告をするにあたり、ご援助下さった各位に厚く御礼を申し上げる次第である。

北大山岳部・山の会によるバルンツェ、ついでダウラギリ厳冬期遠征が一段落し、海外遠征経験者の多くが登山の第一線から退き、山岳部の現役の中に、遠征経験者が皆無の状態となろうとしていた。しかし、ヒマラヤの高峰に憧れる部員は多く、バルンツェやダウラギリ遠征のごとき大規模な遠征以前のマッキンレー、ドレフェカル、シュマリ・クンヤンチッシュなどの登頂のような「現役部員を中心とした海外遠征を」という声が高まっていた。

日頃、北海道内を中心に行っている山行で得た経験と技術を生かせる海外遠征を念願として、当時の主任幹事藤原章生やダウラギリ隊員工藤哲靖など現役部員の有志が集まり、1983年9月、部内に海外登山研究会が設けられ、対象とする山の検討に入った。

1982年のダウラギリ隊に現役部員として参加した工藤以外は、高所未経験者であったため、6000m級の山を対象とすることとし、さらに、比較的费用がかからずベースキャンプまでのアプローチの短いインド・ガルワール地方のガンゴトリ山群を対象をしぼった。ここで参考のために、インドにおける登山許可取得の手続を記しておきたい。

インドにおける登山では、インド登山財団 (Indian Mountaineering Foundation: IMF) に申請して、登山許可を取得しなければならない。ネパールなどの場合とは異なり、日本山岳協会からの推薦は不要で、手続は比較的簡単である。まず登山許可の仮申請を行うが、仮申請書の記載事項は以下の通りである。

①目標の山と標高 (第3希望くらいまで)

②登山ルート概念図 (5部)

③登山期間とインド出入国期日

④隊長を含むメンバーのリスト (氏名、父親名、本籍地、年齢、国籍、登山歴、職業、旅券番号と発行年月日および発行地、旅券で使用したものと同サイズの写真、5部)

⑤派遣母体名

⑥在日インド大使館への査証申請年月日

⑦使用する無線機のセット数

⑧隊荷のリスト (2部)

この仮申請に対し、内定通知が届いたら、登山料を払い込み本申請を行うと正式の登山許可がおりる。

登山料は場所と山の高さによるが、

①ナンダ・デヴィ主峰と東峰…各15000ルピー

②ナンダ・デヴィ内院の山…10000ルピー

③21000 ft (6402 m) 以上の山…7500ルピー

④21000 ft 以下の山…5000ルピー

である。

我々は、地図と写真 (スダルシャン・パルバート峰の南に位置するシヴリン峰の北稜から東大スキー山岳部遠征隊が撮影したもの) から候補をガンゴトリ山群に属する4つの6000m級ピーク、チルバスパルバート峰 (Mt. Chirbas Parbat, 6529 m)、マトリ峰 (Mt. Matri, 6721 m)、スダルシャンパルバート峰 (Mt. Sudarshan Parbat, 6507 m)、およびチャトルブジ峰 (Mt. Chaturbuj, 6655 m) にしぼった。これらの4ピークとするにあたっては、部長の招集による、山の会会員越前谷氏ほか在札ダウラギリ隊員ならびに山の会ヒマラヤ経験者の検討会で、工藤リーダーが計画を説明し、ご意見

を参考として決定した。

スダルシャン・パルバートについては、1981年にインド・フランス合同隊が雪のついた東稜から初登頂し、1983年のプレモンスーンには慶大岳朋会隊が、東南稜からの登頂を試みて不成功に終わっている。我々は、慶応大の津田元氏の助言や、写真の研究から、岩場と雪稜が半々と推定される南西稜を登攀ルートとすることとした。この新ルートは、ほとんど不明であって、タクティクスとしては、高度障害の克服を第一義に考え、それ以外は、現地において判断せざるを得なかった。

つぎに、遠征の時期については、一般に好天に恵まれるのは9月以降といわれている。しかし、記録を調べると、9月末頃、必ずモンスーン明けのドカ雪に見舞われナグレによる遭難がひんぱんに起きており、多少寒くとも、10～11月に最も天候が安定すると予想し、他の遠征隊よりややおそい10月に入山することとした。この予想は適中することとなった。

その後、1983年11月29日付でインド登山財団 (Indian Mountaineering Foundation) に上記4ピークを上記の順位をつけて登山許可の仮申請を行ったが、同財団からは、1983年12月21日付で、上の4つのピークのうちスダルシャン・パルバート峰の登山許可の内定通知を受けた。第一候補であるチルバス、第二候補であるマトリ両山ともに、中国国境に近く、登山禁止区域に属するため登山許可は与えられないということであった。その後ただちに登山料7500ルピーを払い込み、3月24日付で正式の登山許可を申請し、7月末に登山許可の通知を受けることができた。

つぎに隊の構成についても、部長の招集した札幌ダウラギリ隊員、山の会ヒマラヤ経験者による検討会でのご意見を参考にし、すべて山岳部員により構成し、医師としてカラコルム・ドレフェカル遠征の経験をもつOBの河合範雄隊員が加わるようになった。最終的に決定した別記8名の隊員のうち、ダウラギリI峰冬期遠征の現役部員として加わったリーダーの工藤とOBの河合隊員をのぞく6名の隊員は、すべて海外遠征未経験者である。

最後に、対象とする山、行動計画、隊員、救難対策すべてについて、昭和59年5月10日、北大百年記念館で開催の海外遠征委員会（議長、朝比奈山の会会長）で、7名の委員、山岳部長出席の下で、リーダー候補者工藤が詳細を説明した。これに対し、各委員より質疑、助言をいただいた。これらのご意見を参考にし、隊では計画を一部、補足、修正し、最終的に計画が承認され、確定したのである。遠征隊の名称等は次のとおりである。

1) 隊の名称

「北海道大学山岳部インドヒマラヤ遠征隊1984」
「Academic Alpine Club of Hokkaido Indian Himalaya Expedition 1984」

2) 主催

北海道大学山岳部

3) 目的

スダルシャン・パルバート峰(6507m)の南西稜からの初登頂

最後に遠征資金についてであるが、これは我々が最も頭を痛めた問題であった。本来ならばすべて自己負担でまかなうべき性質のものであろうが、

遠征準備と平行して行うアルバイトによる自己資金づくりには限度があった。幸い、杉野目部長からお願いした北海道新聞社と北海道文化放送が後援して下さることになり、不足分、160万円の一部がまかなわれることとなった。部長の方針として、今回はそれ以上は外部からの寄付はお願いせず、不足分は山の会会員のご支援に頼るということになった。結局、杉野目部長と朝比奈山の会会長のお取りはからいにより、北大山の会会報第57号に計画全般を公表するほか、5月には6ページにわたる計画書を作成し、山の会会員全員に郵送して拠金をお願いし、多数の会員から多額のご援助をいただいた。また、隊員が趣意書を持参して一部企業にご支援をお願いし、食糧、装備等の多くの現品寄付をいただいた。これらのご援助の結果、計画はスムーズに進み、遠征を成功させることができた。北海道新聞、北海道文化放送はじめ、ご援助いただいた企業、山の会会員各位、その他のご支援いただいた方々にこの紙面を借りて深く感謝の意を表する。

ガンゴトリ山群スダルシャン・

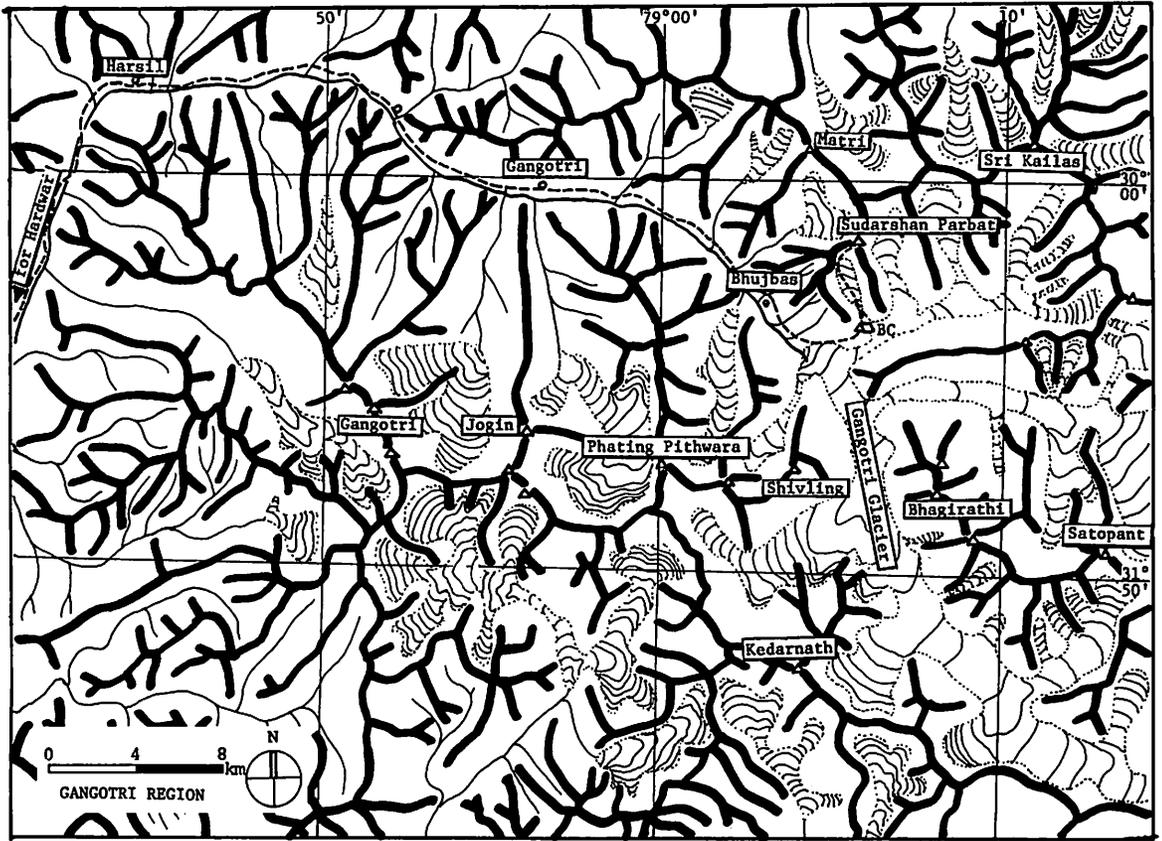
パルバート峰について

ガンゴトリ山群は、インドヒマラヤの東端部、ガルワール地方の北西部に位置し、ガンジス河の源流をなすガンゴトリ氷河周辺にある。この山群は中国領チベットの国境に近接しているため、1979年まで外国隊の登山は許されず、インド隊のみが登山活動を行っていた。登山が解禁された現在でも、外国隊の活動は山群全域にわたって認められているわけではなく、一部の登山区域に限って登山許可が与えられている。これらの登山区域内の

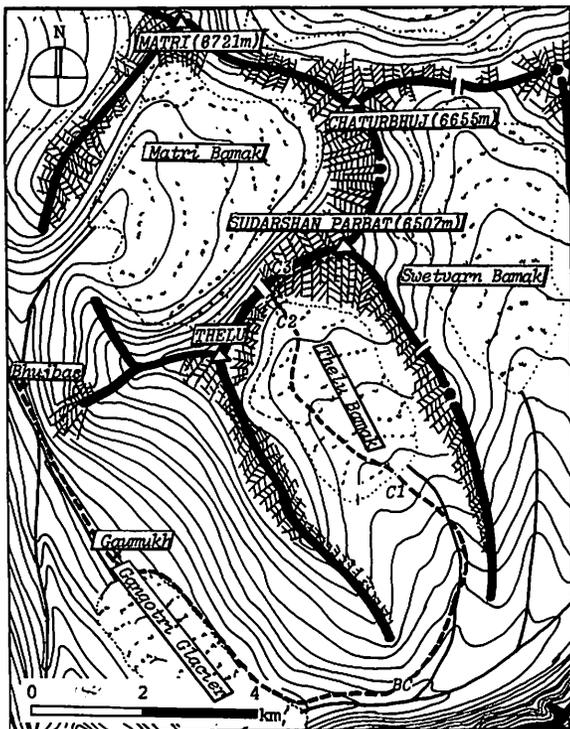
著名な未踏峰のほとんどは、インド隊により登られている。

我々がめざしたスダルシャン・パルバート峰(Sudarshan Parbat 6,507 m:「スダルシャン」はサンスクリット語でbeautifulあるいはlovelyの意)は、ガンゴトリ氷河の支流、パクトゥヴァルン氷河の北西に位置し、まだ登山が解禁されていない未踏峰、マトゥリ(Matri 6,721 m)とスリカイラス(Sri Kailas 6,932 m)の南に、その秀麗な山容を誇っている。

1979年の登山解禁後、ガンゴトリ氷河を隔てたシヴリン峰(6,543 m)、ヴァギラティ峰(6,856 m)、ケダルナート峰(6,940 m)などには、多くの外国隊が遠征しているが、スダルシャン・パルバート峰への外国隊の挑戦は意外に少なかった。解禁前におこなわれた5回におよぶインド隊の挑戦は失敗に終り(うち4回は南西稜からのアタック、詳細は不明)解禁後の1981年5月、東稜からインド・フランス合同隊が初めて登頂した。その後、1983年5月に慶応大学岳朋会隊が東南稜からの登頂を試みたが不成功に終った。我々がルートに選んだ南西稜は未踏のまま残されていた。



キャラバンルート図 A map of the route from Harsil to Sudarshan Parbat



スダルシャン・バルバート周辺略図とベースキャンプからの登攀ルート The route to the summit



SUDARSHAN PARBAT

Members of the expedition

2. 隊員の構成

(昭和59年9月現在)



リーダー 工藤哲靖 (25歳) 山の会会員 昭和59年 北大文学部文学科卒



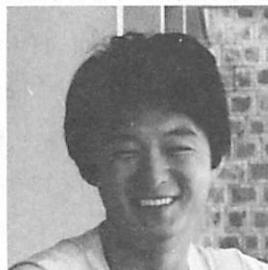
アシスタントリーダー 藤原章生 (23歳) 北大工学部資源開発工学科3年 登攀計画担当



メンバー 坂井忍 (24歳) 北大工学部建築工科大学院修士課程1年 会計・気象担当



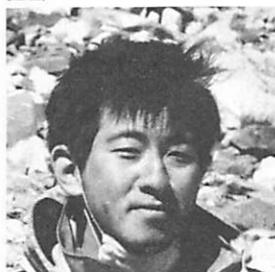
メンバー 樋口和生 (22歳) 北大農学部畜産学科3年 渉外担当



メンバー 宮本真 (22歳) 北大理学部化学第二学科3年 食糧担当



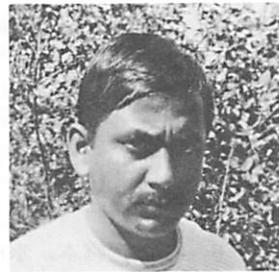
メンバー 高原昌也 (21歳) 北大教養部2年 装備担当



メンバー 岡島伸浩 (19歳) 北大教養部2年 記録担当



メンバー 河合範雄 (31歳) 山の会会員 昭和52年 北大工学部精密工学科卒, 昭和59年 札幌医科大学卒・医師 医療担当



リエゾン・オフィサー Subir Kumar Ghosh (32歳) インド空軍勤務



コック Bachan Singh Panwar (25歳)

3. 遠征隊日誌

SUDARSHAN PARBAT

Diary of the expedition

9. 8 遠征隊壮行会 於札幌雪印パーラー
9. 17 先発隊(工藤, 坂井, 樋口, 宮本, 高原) デリー到着。
9. 24 後発隊(河合, 藤原, 岡島) デリー到着。
9. 25 深夜デリー出発
9. 26 ウツタルカシ着
9. 29 44名のポーターと共にウツタルカシ出発, 同日, ガンゴトリ着。
9. 30 ボジュバサ(標高3800m) 着
10. 1 全隊商B.C.(標高4600m) 予定地に集結。ゴムク(標高3900m)に馴化キャンプを設営。
10. 3 工藤, 河合B.C.入り。
10. 4 樋口, 宮本, 高原, 岡島B.C.入り, 藤原, 坂井高度障害のためボジュバサへ下山
10. 5 工藤, 樋口, 岡島, C1予定地(標高5300m) 往復。
宮本, 高原, B.C.にて隊荷整理, 藤原症状悪化のため河合とリエゾンオフィサーがボジュバサへ下山。
10. 6 工藤, 宮本, 氷河上ルート工作。
樋口, 高原, 岡島, C1予定地へ荷上げ。
河合, 坂井, B.C.入り。藤原, リエゾンオフィサー, ゴムクで休養。
10. 7 宮本, 高原, 氷河上ルート工作。坂井, 河合, C1予定地へ荷上げ。藤原, リエゾンオフィサーB.C.入り。工藤, 樋口, 岡島, B.C.で停滞。
10. 8 工藤, 樋口, 岡島, C1入り。河合, 坂井, 宮本, 高原C1へ荷上げ藤原空荷でC1往復。
10. 9 工藤, 樋口, 岡島, C2予定地(5800m) 往復。河合, 坂井, 藤原, リエゾンオフィサー, コックC1へ荷上げ。宮本, 高原B.C.で停滞。
10. 10 工藤, 樋口, 岡島, 南西稜のコル(標高5900m)往復後B.C.へ下山。坂井, 宮本, 高原, C1入り, 河合, 藤原B.C.にて停滞。
10. 11 坂井, 宮本, 高原, 南西稜のコルまでのルート整備。藤原, 河合, C1入り, 工藤, 樋口, 岡島B.C.にて停滞。
10. 12 河合, 坂井, 宮本, 南西稜のコル往復。藤原, 高原, C2予定地往復。樋口, 岡島C1へ荷上げ。工藤, B.C.にて停滞。
10. 13 工藤, 樋口, 岡島, C1へ荷上げ。藤原, 宮本, 南西稜の偵察。高原, C2予定地往復。河合, 坂井C1にて停滞。
10. 14 工藤, 樋口, 岡島C1入り。藤原, 坂井, 宮本C2入り。高原, 氷河上ルート整備, 河合, B.C.へ休養のため下山。
10. 15 工藤, 樋口, 岡島, C2へ荷上げ。坂井, 藤原, 宮本, 南西稜上のルート工作。
高原B.C.へ下山。河合B.C.にて停滞。
10. 16 工藤, 樋口, 岡島C2入り。宮本ルート工作後引き続きC2泊。坂井, 藤原ルート工作後B.C.へ休養のため下山。河合, 高原, B.C.にて停滞。
10. 17 工藤, 樋口, 宮本ルート工作。高原C2入り。河合C1入り。岡島, 荷上げのためC2よりC1往復。坂井, 藤原, B.C.にて停滞。

10. 18 工藤, 樋口, 高原ルート工作。岡島, 荷上げのためC2よりC1往復。坂井, 藤原, BC.からC2入り。河合, C1よりC2入り。宮本, 休養のためC2にて停滞。
10. 19 藤原, 樋口, 高原, ルート工作後, C3(標高6000m)入り。河合, 宮本, 岡島, C3建設。工藤, 坂井, C2にて停滞。
10. 20 藤原, 樋口, 高原, 頂上を目指したが, 標高6300m, 上部岩壁の基部にて断念, C2に戻る。工藤, 坂井, 宮本, C3入り。岡島, 荷上げのためC2よりC1往復。河合, C2にて休養のため停滞。
10. 21 第一次登頂, 工藤, 坂井, 宮本, 頂上直下までのルート工作を終了後, アタック敢行。C3帰着は21:30, 河合, 岡島, C3入り。藤原, 樋口, 高原, C2にて休養停滞。
10. 22 第二次登頂, 河合, 岡島。工藤, 宮本, C3からC2へ。藤原, 樋口, 高原, C2からC3へ。坂井, ポーター手配のためBC.へ下山。
10. 23 第三次登頂, 藤原, 樋口, 高原。河合C3からC2へ。岡島C3にて停滞。工藤, 宮本, C2にて停滞。
10. 24 C3, C2, C1を撤収し, 坂井の待つBC.へ下山。
10. 25 全員BC.で休養。
10. 26 荷物の再梱包。
10. 27 BC.撤収, ガングトリへ下山。
10. 28 ウツタルカシ着。
10. 29・30 ウツタルカシに滞在。
10. 31 ガンディー首相が暗殺されたことも知らずウツタルカシ発。深夜, 戒厳令下のデリー帰着。
12. 15 遠征報告会 於北大クラーク会館(午後2時から)主催 山岳部。
祝賀会 於クラーク会館きやら亭(午後5時から)主催 北大山岳部・山の会。



4. 登攀概要

SUDARSHAN PARBAT

アシスタントリーダー 藤原 章生

ルートは全体としてシンプルであった。氷河についてはヒマラヤにつきもののセラック帯、アイスフォールの通過等の心配がなく、又南西稜上は残雪の最も少ない時期であったため岩と氷の地帯がはっきりわかれており、難場もズック靴でスピーディに通過できる程であった。また、天候にも恵まれたのでハーケンを打つ際の雪かきなどもなく、岩の脆さを除けば、実に快適な登攀を楽しむことができた。我々の隊は、「夏は日高の沢登り、冬は稜線大縦走」という登り方を志向する部員の集まりであったため、今回の遠征のように岩場と氷のルートは最も手頃な登攀で、幸運な選択をしたと考えている。

ルートの状態

①BC～C1

テルー氷河の左岸のモレーン上をトラバース気味にジグザクに登行。側面からの落石をのぞき危険はないルートであったので、高度馴化には最適であった。しかし思い出すとC1までの荷上げがなんと長く感ぜられたことか。

②C1～C2

C1から50m程登ったところがテルー氷河。万年雪の氷河の舌端で、その氷を越すと広大なプラトーにでる。幅は、平均500m程でわずかなうねりを見せている。右岸沿いにルートをとったが幅10m程度の小さなクレバスが3、4ヶ所あったのみで、クレバスには念のためザイルを200m程フィックスした。氷河をおおう雪の下は厚い氷で、アイ

スハーケンしか効かない。C2は、プラトーの終点で南西稜上のスグルシャンとテルーピークとのコルの下の落石のない位置を選んで設営した。今回の遠征を通し降雪が皆無に近い好天がつづいたため、ラッセルもなく快適な登降をくり返すことが出来た。

③C2～コル

プラトーから直接コルへ上がる予定していたルートは、落石の危険のある逆層の岩場なので通過はまず不可能であった。だが幸運なことに幅20m位の氷が山稜上のテルーピーク寄りにわずかに残っており、その45～50度の傾斜の雪壁に3ピッチ200m程ザイルをフィックスした。氷が硬く、はじめは少々戸惑ったが何とか一日でルート工作を終えた。

④コル～雪稜

標高5900mのコルから雪稜上の6250mに至るまでの岩場は、4段に分かれており、単なる岩稜というよりも「巨岩が積み重って出来たモザイク状の石段に小さな浮石がへばりついている」といった感じである。コルから見上げると不細工かつ複雑な立体の積み重なりで、雪が付いていないので、不気味な雰囲気を感じさせていた。利尻岳や十勝岳の岩稜に慣れている我々も最初見上げたときには、はたして登れるだろうかと少々戸惑った。

岩稜の登攀に際しては稜線を忠実にたどるには傾斜が著しく急なため、幾分傾斜の緩いテルー氷河側を捲き気味にトラバースしてザイルをのぼし

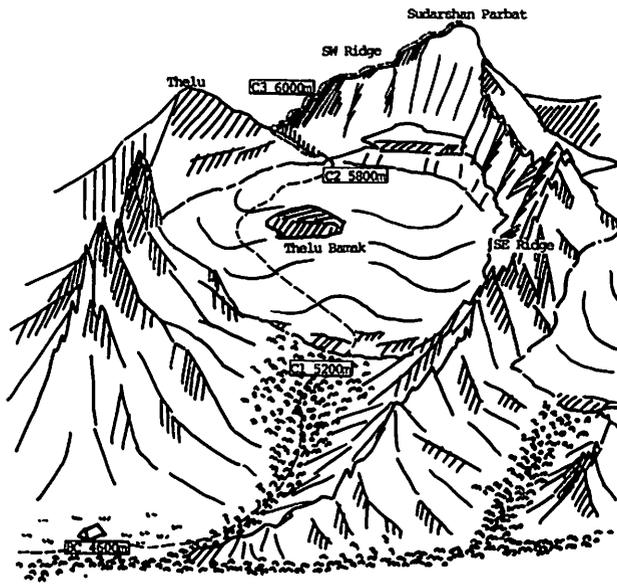
た。特に4段目は長いトラバースを強いられたが、常に足元が崩れ、あまり気持ちの良いものではなかった。核心部である3段目は初めから急な細い岩稜となっていて、稜線を忠実にたどらざるを得なかった。ややオーバーハング気味の巨岩は、アブミ2台とズック靴でどうにかロープをフィックスすることが出来た。ここの通過を考えてアタックキャンプは、3段目の基部に設けた。

4段目の肩である雪稜に出るまでルート工作には、14ピッチで4日間を要したが、一番のポイントは、フィックス用のピンのための最適箇所をさがすことであつたように思う。一ヶ所にあまり効いていないピンを3、4本打って間に合わせたことも多かった。

⑤雪稜～頂上

4段目の肩から先の雪稜は、非常に硬い氷で、スクリーハーケンしか効かなかった。日頃水の登攀に慣れていない我々にとって急な雪の段差があり、結構手こずった。雪稜の先は、頂上直下の岩場となっておりこれも稜上を登ることが出来ず、テルー氷河側を捲き気味にトラバースした。岩質は大して変わらず、落石が多かった。3ピッチで岩場を捲き終わると巾のある岩稜に出る。後立山の稜線のようにボロボロの岩場の登降が続く。岩場を抜けると頂上直下の雪壁が現われ、4ピッチ程ザイルをのぼすと、突如ゆるい雪面となりザイルをほどくことが出来た。

まわりよりも幾分高くせまいスダルシヤンの頂までは、今度の山行で初めてのラッセルが最後のアルパイトとして我々に残されていた。



登攀鳥瞰図

札幌発—インド

藤原 章生

昭和59年4月、私は南アルプスの一年班山行を終え札幌に帰ってきた。私もこれで晴れてルートの5年目で、実質上山岳部の現役を卒業したことになる。

半年余りで事務的手続きの終わった段階にあった隊としては、半年後の出発に向けてその準備を始めなければならない時期でもあった。しかし、ポカポカ陽気のザラメの五月の山を思うと矢も盾もたまず、隊の連中は皆、十勝、日高、利尻、ある者は富士山へと再び散って行った。

雨と雪崩にやられ惨々の山行ではあったが、私は、5月の中旬利尻から再び札幌に舞いもどってきた。

正月に隊員3人の住んでいた深沢マンションというあばら家を火事で焼け出されて、我々の隊は事務局を樋口のアパートに置いていた。汲み取り便所の臭いの充満した9畳間に男7人が集まり皆それぞれ各係に分かれ、分担して仕事にあたっていたが、私は登攀計画という一番面白くかつ楽な係を担当していた。スダルシャンに関しての記録は限られており、特に我々の目指す南西稜についての記録は皆無であったので、高度馴化を中心としたタクティクスを組み、ルートに関しては、結

局、現地で判断するということにならざるを得なかった。

一方、装備、食糧の係になった宮本と高原は、企業まわりなど大変だったようである。

寄付集め、梱包作業などの傍ら、我々は出発直前まで自己資金を稼ぐためアルバイトに精を出した。6月には、日本ライナー(株)という道路のセンターライン等を引く会社のアルバイトを請け負い、交替で北海道中の道路をデッキブラシ片手に走り廻った。初夏の北海道を作業衣を着てのライン引きも中々どうして良いトレーニングになったようである。

そうこうしているうちに短い夏がやってきた。夏休みが来ると私は宮本と八幡平の地質調査に行き、資金稼ぎを兼ねて沢登りを楽しみ、秋風が立ち始めた札幌に帰ってきた。

最後の準備をあわただしくすませ、9月23日60kgの手荷物と共に成田を出発した。

ホンコンの夜景など、初めての海外にすっかり興奮して夜明け前の生暖いデリーに到着した。

通関を済ませ、重い荷物に喘いで表に出るとインド人の喧噪の中、一週間前に着いていた先発隊の樋口のすっかり旅慣れた顔があった。

出発—デリー—到着

高原 昌也

成田を飛び立ってからはじめのうちは、すまして座っていた我々も、香港、バンコクを経て機内がすいてくると、あっちの席へ座ってみたり、今度はこっちの窓から外を眺めたりと、落ちつかなくなった。はしゃいでみたい気持ちを押える緊張感は、入部して、初めて山に行った、あの春合宿のときの気持ちとそっくりだった。ひとねむりしていると、ひとしきり機体が揺れ、深夜のデリーに到着した。

デリーにて

「オーイ、起きろー。」

隊長の声である。デリーではほとんど毎朝、この麗わしき声で一日が始まった。買い出し、あいさつ回り、エージェントとの打ち合わせ、礼状書きと、仕事はたくさんある。しかし、この暑さは、いったいどういう事だ。ホテルから一步、外へ出ると、未だ朝だというのに、熱気に包まれて、圧倒されてしまう。陽が高くなり、真上から激しく襲いかかる光線は、みるみるうちに体から精力を奪いとっていく。それでも、日陰に入って飲むコーラがまた、活力を甦らせてくれる。

—9月18日、日記から—

夕方、近くの公園で寝ころがっていると、おじさんが話しかけてきた。「日本人は働き者だ。」皮肉でも言っているのかと思ったが、そうでもないらしい。「でもおじさん、こんな暑い所で毎日仕事してるあんたの方が、ずっと働き者だよ。」

日本語でそう言い返すと、キョトンとした顔をして向うへ行ってしまった。

—ああ、今日も暑い1日が終わった—

暑くても、仕事の方は順調に進んだ。

IMFにスグルシャン・パルバート峰に関する記録があるというので、宮本と一緒に調べてきた。互いに不勉強を嘆きながら訳したが、やはり“岩がもろくかなり難しい”と記載してあった。

一週間後に後発隊の3人が到着し、これに「ケッケケツ」と陽気に笑うリエゾンのミキが加わって、隊員が勢ぞろいした。

「バクシーシ」の追っ払い方を覚え、インド人特有の鋭い目つきも気にならなくなれば、“インド馴化”の第一段階はOKだ。

詰めたりとり出したりの煩雑なパッキングを終えてやっと落ちつくとき、期待は次の町ウツタルカシへと移っていった。

ウツタルカシまでのチャーターバスは4時間遅れてやってきたが、誰も文句は言わない。とにかく来てくれればいいのだ。広い車内に乗りこむと、横になるもの、腕を組むもの、窓ガラスに顔をおしあてて外を見ているもの、皆思い思いのスタイルでおし黙っているが、考えている事はあまり変りがない筈だ。

高ぶる思いを乗せて、バスはデリーの街を走り出した。

デリーからベースキャンプ(4,600m)へ

岡島 伸浩

隊荷の梱包をやっと終え、ホテルの玄関に山のように並べてあとはチャーターしたバスを待つだけ。偶然同じYMCAホテルに隣りあわせた、雪崩で隊員を失なった旭川の隊の方々に会いあいさつをかわす。バスはこない。エージェントに問いあわせたがいつものとおりラチがあかない。さっきから一台のバスがホテルの前に停車している。「あんたたちはこのバスの客じゃない」とバスの運転手は云う。よくある手違いで、そのバスが我々のバスだった。紅みがかかったデリー郊外の夜を、北へとバスは走っていく。まあ、順調にすべりだしたようだ。ノープロBLEM。

翌9月26日。夜明け前の寒さで目が醒める。バスの窓からはあい変わらずの風景。昼まえに、ひと昔前にビートルズがメディテーションに来たりシケシの街を通る。吸い込まれそうな深緑のガンガが印象的であった。ヨギ(インドの修行者)のメッカである。

ここまではずっと、デリーから200km弱、平原をひた走って来た。そしてこれから、ヒマラヤ山脈の一部であるガルワール地方に入っていく。案の定道も山嶺を曲りくねることが多くなる。リシケシの街の全貌が望める。

峠を越え、テリーという村を通過して、陽がまだ高い時刻にキャラバンの前衛基地となるウツルカシに着いた。

本格的なキャラバンを開始するまでの二日間を食料の買出しやポーター集め、二、三の役所まわ

りなどに費やす。僕にまわってきた仕事は、雑用と、プラパールに梱包した装備をひっくり返して、ポーター1人あたりが背負う規定の20kgにするように苦労している高原さんの手伝いである。ポーターの方もネギーという手配師にまかせて、けりはついた。ほとんど全部の登山隊がここでポーターを集めて行くので、あちらも慣れたものだ。

メルという山に登りに来ている日本のパーティーにあった。その隊の人が登山中歯が痛くなったらしく、医者にかかりにウツルカシに降りて来ていた。まだ、白い山々は見えないが、確かにヒマラヤの山は近い。

9月29日。ウツルカシを出発し、ヒンズーの聖地であるガンゴトリに入る日。僕たちは隊荷とともに再びバスにのる。ポーター連中はローカルバスで先行する。

バスのカセットプレーヤーがインドの歌謡曲をガンガン鳴らしている。

左前方に雪におおわれた山が初めて姿を現した。そんなに遠くない。アゴが上向きになりそうな高さで、緊張する。あのなだらかな十勝連峰のすそ野から、白く横にわっている山々をはじめて間近かに眺めたにきの感激とにた感じだった。

前に座っていた手配師のネギーに山名を尋ねると「バンドルパンチ」と答えた。

ガンゴトリにたどり着くまでに一度バスからおろされた。軍隊のキャンプがあるランカーであった。そこから一時間程、すでに奔流となったガン

ガに沿って歩く。車が通れる道が上の方についているが、まだ橋が完成していない様であった。ここで始めてポーターに荷を背負ってもらう。

再び別のバスにのり込む。一台のバスに隊荷とともに僕たちとポーター40余人が乗ったが、残りは荷物といっしょに屋根の上。ポーター達と談笑する我々をのせて、バスはサイドが何百米もきれ下ちている恐ろしい道を走る。

やはりスタルシャンが姿を現し、まもなく聖地ガンゴトリに着く。

9月30日。いよいよポーターを引きつれてのキャラバン。スダルシャンが雲ひとつないヒマラヤの空に正面にそびえる。道の左右は巨大な杉の木が茂る急な斜面。今日はボジュバサまで一日かけて歩けばよし。立派な道で、時折敬虔なヒンズーの巡礼に出会う。雪の連山が見えてくる。

ボジュバサにはラルババという聖者がアシュラムを営んでおり、これから先は人は住んでいない。スダルシャンはパツとしなくなったが、正面にはバギラティ山群が全貌を現す。ラルババのアシュラムでは、異教徒の我々にもチャパティの食事をふるまってくれ、その夜は礼拝の儀式にわかヒンズー教徒になって参加する。

10月1日。この日は荷をベースキャンプまであげる。あわよくば僕も上の方まで行けるかも知れない。

歩みは次第におそくなり、20kgの荷を背負うポーターに追いこされてしまう。氷河末端の手前のゴムクに全員集まる予定だったけれども、ポーターがどんどん行ってしまい通り過ぎてしまう。すでに4000mに近い。僕は一旦ストップし、藤原さ

んがポーターの後を追っていった。しばらくして工藤隊長がやって来て、最後尾のポーターと一緒に進んでいった。結局、BCに着いたのは隊長だけで、藤原さんは途中で気分が悪くなって休み、ねむり込んでしまったらしい。眠り込んだらますます気分が悪くなったという。夜はゴムクの石室でとまる。あまり食欲がなくなっている。

10月2日。BCまで往復する。ただ、がれた踏み跡をゆっくりと進む。シブリン、バギラティが間近にそびえている。

土砂のまじった氷河の横を進む。ここがガンガが水流となって地表に出てくるところ。

パクトバルン氷河に入って、その右岸を歩く。崩れやすいガレ場をトラバースしたりしてなだらかな草原に出、やがてBCに着く。BCにはすでにコックのバチャンシンが泊っていて、おいしいカレーのたきこみ御飯を作ってくれていた。

—10月2日のメモより—

「BC attack.明日はBC attackののちボジュバサへ降りる予定。高原隊員を除きBCに着く。今晚は少し雲が多い。明日の調子次第でこれからの調子がわかりそうな気がする。唇がカサカサ。」

—10月4日のメモより—

「昨日は全隊員がBCに揃った。工藤隊長と河合ドクターがBCに泊まり、残りはボジュバサに泊まる。今朝はボジュバサからBCに向うが頭痛の隊員、風邪の藤原隊員はボジュバサ。藤原隊員のため河合ドクターが明日ボジュバサに降る。隊長と樋口隊員と僕は明日上部の偵察の予定。宮本、高原隊員は隊荷の整理。やっとBCに落ちつくことができた。」

ルート工作

宮本 真

「バタバタバタ」と外で何か音がしていた。おそらく、隊荷にかぶせたブルーシートが強い風にはためいているのだろう。陽射しは強くブルーのテントの片側がまぶしい。しかし、とても寒い。気温はマイナス15度程度だろう。日本の山では味わえない感覚だ。しばらくシュラフの中でじっとしていると、外で声がする。「チャーイ、チャーイ」コックのバッチャン・シンがミルクティを運んで来たのである。テントから顔を出すと、まず群青色の空が目飛び込んできた。テントから顔だけ出して紅茶をすする。幸福な時間である。10月5日、ベースキャンプで迎える初めての朝。快晴であった。

その日、食糧係の私は食糧の整理だけしていれば良かったので気が楽だった。他の隊員はテレー氷河の偵察に行ったり、装備や薬品の整理をしている。前の晩は初めての高度に泊ったせいか、中々寝つけなかった。みんなも眠そうである。しかし私は寝不足以外に高度障害はあらわれなかったので安心した。標高が4600メートルと高いため、他の隊が皆そうであったように、我々もここまでの高度馴化で苦勞させられていた。それにしてもここは良いところだ。真正面には秀峰シブリンが聳え立ち、近くに小川が流れている。上の方の斜面をアイベックスという鹿の仲間が群をなして歩いている。目の高さを手が届きそうなところまで飛んでくるのは、くちばしが黄色いヒマラヤガラスだ。真上を見ると、翼が2メートル程もある大き

な鳥が悠然とはばたいている。遠征においてベースキャンプがやすらぎの場所であるなら、これ程の場所はないように思えた。景色を眺めながら、ゆっくり食糧の整理をしていると、すぐに一日が終ってしまった。

次の日、いよいよ白い氷河の上を歩けると思うと胸が高鳴った。もう、きたない氷河とガレは本当にいやだった。朝、工藤さんと岡島とでC₁を出発する。10分程歩いた最初の渡渉点で「アッ」という悲鳴に近い声が出た。「こりゃ、あかんわ。」独特の関西弁で岡島がぼやいている。振りかえる。「アッハハハ」なんと、渡渉に失敗して体中びしょ濡れである。岡島は工藤さんにもう帰れと言われて何か寂しそうだ。「すみません。」まあ、仕方ないだろう。その時から、この渡渉点は隊員の間で「岡島の泉」と呼ばれるようになった。結局この日は氷河の上に顔を出したぐらいで終り、ベースに帰ると岡島は濡れた物を乾かしストーブにあたっていた。「どうでした。」などと言ってケロリとしている。最年少で経験も少ないため、かなりのプレッシャーがあるはずだが、そんな事を感じているのか、いないのか、表面に出さない。彼には遠征中ずっと感心させられることになる。

それから数日は、ベースキャンプからC₁予定地上部の氷河のルート工作をした。ヒドンクレバスに注意しながらコンテで歩き、要所にはロープをフィックスした。毎日、氷河末端までの急な登りには閉口させられたものだ。腰掛けるのに調度良

い岩を見つけては、五分程景色を眺める。皆、それぞれのペースで登っていく。下の方を見ると他の連中が赤や青の点になって見え、上の方では誰かが石を落したのか落石の音がする。全くのんきなものだ。ベースキャンプから一時間半程沢沿いに登っていくと、前方に真白な氷河が見えてくる。その末端がC₁ 予定地である。支流の氷河なので規模は小さいが本流とは比べ物にはならない程美しい氷河だ。遠くから見ると真白であるが、氷河末端に着いてみると、それが青く透き通った本当の水であることがわかる。ここに着く頃にはもうのどがカラカラに乾いている。ベースキャンプの水は白濁していたが、ここのは気持ち良く澄んでいた。氷河が溶けだしてきたものだが、予想通り味は変わらなかった。しかし何か贅沢をしているような気分になる。

私は比較的高度障害に悩まされなかったのであるが、それでも初めての高度に泊る時などは苦勞した。C₁ に初めて泊った次の朝、私達は南西稜を目指して出発した。氷河を三人がコンテで歩くので、自分のペースをつかみにくい。トップの坂井さんと、ミッテルの高原は早いペースで進んで行く。体が重く、とても息が苦しい。左手に持つループが少なくなりがちになり、2、3歩あるいては10回息をする。振りかえれば氷原のかなたにガンゴトリの山々が続いているはずであるが、それをゆっくり楽しむ余裕さえなくなっていた。もう一步も歩けなくなった時、やり過ぎたと思った。C₂ 予定地がすぐそこに見えるところで、前の2人に断って先に行ってもらうことにした。それまでも、軽い頭痛や体のだるさはあったが、こんな

ことは初めてであった。C₁ に帰ると、激しい頭痛、吐き気、発熱、アルファ米のジャリジャリの雑炊がのどを通らない。ドクター河合に助けを求めると、何もしてくれない。ただ一言「大丈夫」とおっしゃった。本当に医者だろうか。トランシーバーでベースキャンプの隊長と、私の処置について話しているようだ。ベースキャンプにおろすかどうか相談している。C₁ までの急登はもうこりこりだったので、大変気になって聞き耳を立てていた。結局、次の日の朝の様子を見て決めることになった。隣のテントでは、人が苦しんでいるのに楽しそうに話が盛り上がっている。本当に情けなくなってきた。この日は、祈るような気持ちで眠りについた。そして次の日朝起きると、昨日まで頭の中にかかっていたもやが、すっかり晴れたようにすっきりしている。体も何ともない。高度に馴化するという事は、全く不思議なものである。

それから数日は、C₁ から南西稜のルート工作をした。C₁ から標高50メートル程の氷の急斜面を登ると、はるか遠くまで続く雪原が目に入り、そのうねりのむこうにテレーが見える。陽があたると、とてもまぶしく、サングラスなしでは目を開けていられない程だ。さらに百メートルの苦しい急な登りを終えると、野球場がいくつもできそうな、広大な台地が広がり、その向こうには野球場のフェンスのように、ギザギザの岩稜が氷河を取り囲んでいた。急峻なヒマラヤの中に、これ程の平原があるとは何とも不思議に思えるが、これが大自然なのだから仕方がない。テレー氷河を囲む岩稜には三つのピークがあった。スダルシャンと、その二つの衛星峰である。南西稜の先にテレーが、

南東稜の先にはコテシュワールがあった。南西稜に取り付く雪壁の下、つまり野球場の左中間の一番深いところにC₂を設営した。

C₂からのルート工作や荷上げが、体力的にも精神的にもきびしいものであった。しかしその分ルート工作の喜びも大きい。毎日、テントに陽があたらないうちから動きだし、ポロポロの岩稜にロープをフィックスした。本当にいやな稜線だ。文庫本のような岩を不規則に積み上げたようである。カラスが上部の岩にとまって、こちらを見ていることもある。おそらくベースキャンプにいた、いじきたない奴等だ。「お前らにやる物などないぞーバカヤロウ。」などと叫んでみても一向に気が晴れない。それにしても六千メートルでの行動はえらく疲れる。実際に体を動かしている時間は僅かなのだが、テントに帰るとくたくたになっている。三時頃テントに着くのであるが、食事をする前にまず一眠りするくらいである。そして、六時に起きて食事の仕度をしながらトランシーバーで交信する。

「エーこちらC₁、C₂どうぞ。」

「ハイC₂です。どうぞ。」

「下から見るとザイル延びていかないけど、ルートどうなの？」

「エート、ポロポロの岩で、夢のようなクライミングを提供してくれます。どうぞ。」

「……………」

みんな、もうあんなところは登りたくないという様子である。たまにシブリン隊の交信が入ることもある。

「エーこちらB隊です。A隊どうぞ。」

「ハイA隊です。今日は例の岩稜から雪壁を抜け、ハングした斜上クラックを人工で登りました。どうぞ。」

「……………」

うらやましがってはいけないと思うのだが、手が切れるような花崗岩のリッジを登っている彼等の姿が目には浮かんでしまう。氷河一つ隔てて、これだけ違うのである。

我々は南西稜をいくつか区切って呼んでいた。一段目から四段目の岩稜帯、その上部の雪稜、さらにその上部の岩稜、最後に、頂上直下の雪の壁である。核心は三段目の岩稜であった。取り付きが急で、その上はまたいで通過しなければならない程細かった。右側はC₂までの数百メートルが切れ落ち、その向うにはすでに小さくなったシブリンがあった。左側は数千メートル下まで空間が広がっている。信じられない程の高度感である。浮き石を落しながら行くのであるが、きりがないのでそれを押えながらホールドにする気持の悪いクライミングである。そこにワイヤバシゴ一つとアブミ二台を固定した。若干、オーソドックスではないが、トップの藤原さんは気にかけていないようである。そして、三段目をこえての危険な荷上をさけるため三段目の下にC₃を設営した。

4段目上部までのルート工作を終え、アタック隊がC₃入りすることになった。藤原さん、樋口さん、そして高原の3名である。アタックの距離は多少長いように思えたが、二日あれば届くだろうという話は、昨晚全員がC₂に集まっている時に確認していた。外が寒いので全員集合と言っても隣のテント同士でトランシーバー交信する。

「ねえ。トランシーバーつけてよ。」

「ああ、わかった。」

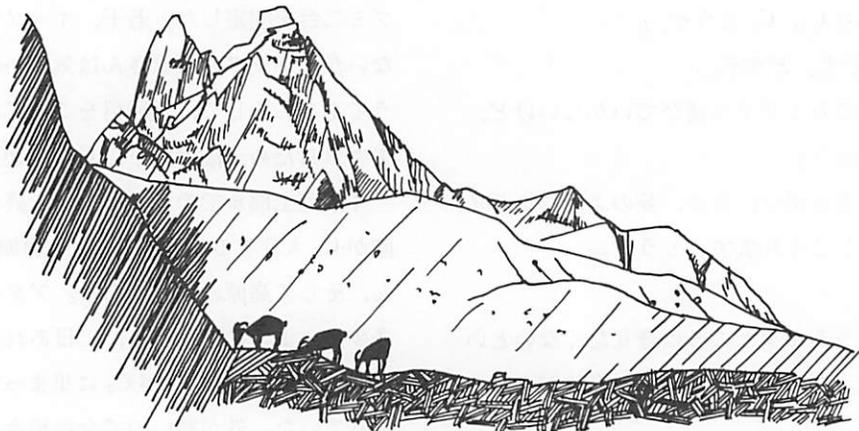
「こちらC₂どうぞ。」

「ハイ隣のテントです。どうぞ。」

さて、最初のアタックの日。我々の役目はC₂からC₃への荷上げであった。はるかにアタック隊を眺めると、ザイルが全然伸びていず何時も同じ場所と同じ様な格好をしているように見える。幼い頃良くやった「ダルマさんが転んだ」のようだ。結局その日、アタック隊は雪稜の途中までしか進まなかった。そして二日目。私と岡島は休養を兼ねて、C₁から食糧を荷上げた。アタック隊は悪戦苦闘している様だ。昼頃C₂にもどって来た時、同じように雪稜の途中にいたので、もうアタックを終えた帰路だと思った程だ。それまで私は、登頂を楽観的に考えていたのだが、この日、彼等の

行動を見ていて少々不安になった。

さて、いよいよ我々がアタックする番が来た。我々は当然、登頂までには数日を要すると思っていた。工藤さんと坂井さんといっしょにC₃に入った日の夜、星がとても美しく見えた。山で星が綺麗なのは慣れていたはずだが、どんなに無骨な人間でもロマンチストに成らざるを得ない。ヒマラヤとはそんな所だ。肉眼では星も氷河も動かない。しかし人間の営みとはくらべものにならない周期で動いている。もし8ミリフィルムで、氷河の動きがわかる程に、時間を短縮して撮映したら、我々がここに来たことなど、フィルムの一コマ分にもならないだろう事が実感できた。その日、アタックの前日、私達は、悠々たる時の流れの中で、緊張することもなく、ぐっすり眠ることが出来た。



BCに遊ぶアイベックス

登 頂

リーダー 工藤 哲靖

10月21日、最後のルート工作に出発した。残されていたのは、雪稜の終了点6300m付近から、頂をさえぎるように突立っている岩壁と、それに続く岩稜、そして頂上直下まで続くであろう急傾斜の雪面。一日でカタをつけるには多少量が多いように思えた。その上6500m近い高度でアイゼンを着用しての岩登り。はたして自分達にそれができるかどうか、不安は尽きない。上部岩壁だけは今日中というたてまえと、行けるものなら頂上まで行ってしまえという本音。決めかねるままに最初のアブミに手をかけた。

岩壁の基部で残された工作資材いっさいがっさい身につけると、腰や胸はハーケンやカラビナでずっしりと重くなる。1ピッチ2ピッチとザイルを延ばす毎に体が少しずつ軽くなり、それが幾分でも頂に近づいた証になる。

ほぼ垂直に切り立った正面の岩壁を避け、内院側にルートを延ばす。壁に太陽をさえぎられ、うすら寒かった取り付きから、岩の小屋根を越え、南面のテラスへ出るといっきに陽を浴びる。C2がほとんど真下に見える抜群の高度感である。ひとかかえもふたかかえもある岩が到る所でぐらつきながらもかろうじて崩壊を免れ、稜線上に積み重なっていた下部岩稜にくらべ、この岩場は安定していた。大ざっぱなホールド、スタンスに思い切って身を任せ強引に越えて行く。

岩壁の頭に出てようやく先のルートが見渡せた。空身でトップをリードする宮本が何個目かの岩の

高まりを越えようとしたとき、振り向きざま青空にこぶしをかざした。白い歯がこぼれていた。ピッケルを振って答えザイルをたぐって行くと、頂に続く雪稜が白く輝いてまっ先に目に入った。足許からそこに続いている岩稜は、既に稜と呼ばれるにはおこがましい、内院側にゆるく流れる太い岩尾根だった。勢いづく宮本をさらにけしかけ、トップを走らせる。頂はもう手の届きそうなところで青空に接していて、明日またここまで登ってくるなどとんでもないことのように思えた。60mのザイルを2本、いっばいに延ばすと前と後ろでは何を叫んでいるのかさっぱりわからない。宮本が派手にピッケルを振り回し合図する。ザイルをぐいぐいひっぱり、浮き石を蹴落しながら追いつく。真下に見えるC2では、もう豆つぶ大にしか見えない隊員達が、時折思い出したように動き回っていた。

最後の電壁に取り付いたが、思うようにザイルが延びて行かない。もたつく宮本を見守っていると、アイスハンマーまで取り出してアイゼンの前爪を蹴り込みだした。雪面の下にはやはり蓄氷が隠れていた。しかし、ダブルアックスなど見よう見まねの技がこんなところでどうなるというのだ。「カッティングだ。カッティングしろ。」思わず叫んでしまう。我にかえった宮本がようやくスタンスを切り出し始めた。落ち着きを取り戻したのか、下をのぞき込むように私達を見おろした宮本はエヘへなどと恥ずかしそうに笑みを見せ、今度はア

イスハンマーをしまい込み、ピッケル一本で、ややガニ股気味に登り出した。アイゼンの爪を全部雪面に食い込ませ、バランスよく登る。そう、始めてアイゼンを着けた時最初に教わる登高法だ。余裕があるかに見えた宮本も、頂を間近かにし、あっというまに過ぎ去った時間にあせりを感じ、まさに浮き足立っていた。おそらく後ろの二人も同じだったろう。

ようやくのことで頂を囲む平らな雪面に出た時、陽はとっくに傾き、見おろすC2は、既にスグルジャンの衛星峰であるテールの陰影の中に深く沈んでいた。頂は、雪面のかたすみのほんの数メートルの雪の高まりだった。

午後4時20分、まず宮本が、そして私が、数分遅れて坂井がやってきた。C3の食糧袋の中で、おそらく、ラーメンやビスケットの下でくしゃくしゃになっているエーデルワイスの部旗のことを話すと「エーッ」と宮本。「登れりゃそれでいいだろ?」となだめすかし、あとはほっておく。坂井

を迎えようやく三人そろって頂に立った。握手をしてみるもののなぜか照れ臭さが先にたってごちなくなってしまう。しかし、それにしても何とも言いようのないヒマラヤの素晴らしい眺め。ほんの数メートル登っただけでも頂とそうでないところの展望には格段の差があった。昼間あれ程白く強烈に輝いていた山々も、淡い落ち着いた輝きに変わりつつあった。この小さな雪の高まりにも、黄昏が迫っていた。

坂井がポケットから小さなカメラを取り出しゼンマイを巻く。自動巻き上式カメラに変わりはなかったが、フィルムが切れんばかりに大袈裟な音をたて笑いを誘う。

午後4時30分、既に淡いピンク色に染まりだした頂を後にした。振り返ると、ほんの数分居ただけなのに、交錯した三人の足跡は、まるで大騒ぎでもしたかのように小さな頂いっぱい広がっていた。まぶしい程に燃え始めたアーベントロートの中、長くつらい下山が始まった。



部旗のかわりに千人針を...
(頂上にて)

撤収から解散まで

坂井 忍

BC撤収

10月27日、午前11時。キッチンの横の焚火がようやく下火になった。それを待っていたかのように、皆いっせいに重い腰をあげ、ベースキャンプをくだりはじめる。見飽きた風景だが、これが見おさめだとおもうとなんとなく気になり、何度かうしろをふりかえる。もうすこし長居したかった、そんな感傷がふとわきおこった。もういちど、目に焼きつけるようにじっくりとまわりを見渡したあと、先行するポーターたちに追いつくためピッチをあげた。今日の目的地ガンゴトリまでは6時間の行程。そうのんびりはしてられない距離である。

午後5時半、ガンゴトリに到着。道路わきの店や、行きのキャラバンで泊ったバンガローの戸はかたく閉ざされており、すでに冬籠りにはいていた。我々は、ミキ（リエゾン・オフィサー＝連絡将校）のつてをたよって公用宿舎に泊ることにした。

10月28日。ジープとバスを乗り継いで、ウツタルカシに到着する。一カ月ぶりに見る町の喧噪である。

登頂祝賀パーティー

ウツタルカシで二日目の晩のことである。見せたいものがあるとミキがいうので、わたしたちは彼の部屋に集まった。彼は、ていねいに梱包された包みを八つ、自分のバッグの中からとりだすと、一人一人隊員の名を呼んでその包みを渡しなが

ら登頂祝いのことばをかけてくれた。ささやかな登頂祝賀パーティーである。おもいがけないプレゼントに照れ笑いしながら、幾重にもつまれた新聞紙をあけてみると、なかから大理石の壁掛がでてきた。ガラス細工の置物をもらった隊員もいた。デリーで買い求めてからずっとこの時まで、彼のバッグの底にしまいこまれていたのである。心にくい演出である。やがてミキ秘蔵のラム酒がでてきて、パーティーにはわかに盛りがあった。この晩、彼がインドにはめずらしい大酒家であることがわかった。

首相暗殺

10月31日早朝、ローカルバスに隊荷ごと便乗してデリーにむかう。

ウツタルカシを出てまもなく、我々をはらはらさせ、視線を釘付けにするような断崖絶壁や峡谷が現れだす。谷底まで二、三百メートルはあろうかとおもわれる崖縁を、バスは延々と走りつづける。

ヒマラヤからのびる屋根が、ガンジス平野におちこむあたりに、リシケシがある。ここまできると、あの断崖絶壁は姿を消し、代って広大な平原がはじまる。我々はここでバスを乗り継ぎ、地平線までつづく国道を、デリーにむかって進んだ。

午後7時、デリーまであと一時間の距離である。陽はすでに沈み、単調なバスの振動に、我々は心地よくまどろんでいる時だった。とつぜんバスのなかざわめきだした。途中から乗りこんできた

乗客がもっている新聞を、ほかの乗客たちがみて騒いでいるらしい。隣席のミキが、まもなく聞きつけてわたしにいった。

「今朝、ガンジー首相が暗殺された。」

彼はつづけて、ガンジー女史がどれほどみんなから慕われていたかを説明し、けわしい表情でつけくわえた。

「大変なことになるだろう。」

その時、わたしにはまだ、ことの重大さがわからなかった。

暴動の噂

午後8時すぎ、デリーに帰還する。インドの首都デリーは、ニューデリーとオールドデリーの二つの街が互に接するようにしてできている。そのオールドデリーのバスセンターに、わたしたちをのせたバスは到着した。ニューデリーで暴動が起きているという噂が飛びかかっており、緊張した空気がただよっている。ニューデリーのYMCAに泊りたいのだが、タクシーはもちろん、リキシャたちもこわがってニューデリーへ行こうとはしない。しかたがないので、オールドデリーで宿さがしをすることにす。4台の二人乗りリキシャに、隊荷もろとも分乗し、まずはバスセンターを出発した。

ニューデリーでは暴動がおきているというのに、ここオールドデリーの町中はやけに静まりかえっている。暴動の噂はほんとうなのだろうか。しかし夜間とはいえ、幅30メートルもあろうかとおもわれる幹線道路に、そこをとおる車が一台もない、というのも妙である。半信半疑になりながら、無人の街路をリキシャで走りまわる。

ホテルさがしは難行した。ホテルというホテルはみな、なぜか満室である。空き部屋が二つあるホテルを何とか見つけ、ようやくそこにもぐりこむことができたのは、四時間におよぶ深夜の彷徨の末であった。

午前7時頃、目がさめる。窓の外には何時ものにぎわいが戻っている。ラジオのニュースでも、昨日の暴動については一言もふれていない。暴動の噂はうそだったのか。ミキはさっそく、ニューデリーにある軍関係の宿舎に一旦身をよせたいという。わたしたちも、オールドデリーだと何かと不便なので、できるだけ早いうちにニューデリーに宿をみつけて移りたいと思っている。隊荷の移動その他には、ミキの協力がぜひ必要である。彼の協力が得られる今日のうちに、宿を移すことにした。善は急げ。さっそく輸送手段をさがしにかけた。

段取りはきまった。隊荷は小型トラックで運び、隊員たちは一台のオートリキシャでピストン輸送することになった。めざすはYMCA。ここなら何時いっても泊れるはずである。

暴動はほんとうだった

ところが困ったことになった。あてにしていたYMCAは、世界看護婦大会とやらの会場になっており、一週間ほどの間貸し切られているため泊れないのである。YMCAなら大丈夫だといったではないか。ミキがわたしを責める。YMCAの前で云い合いをしてもしかたがないのだが、わたしたちは焦っていた。あたりの雰囲気がおかしいのである。ここへくる途中、聞いていた暴動やその痕跡は目にしなかったが、ニューデリー全体が

やけに静まりかえっている。人や車の流れもほとんどない。あの雑踏は一体どこへいったのだ。とにかくこの場をはなれ、ほかの宿をあたってみることにした。

三つめの宿でのことだった。ミキと河合さんと私の三人で、部屋を見ながら宿代の交渉をしているときだった。ガチャンガチャンとガラスのわれる音が聞こえてきた。様子を見にいった宿の主人は、何か叫んだかとおもうと、血相をかえて裏のほうへ走っていった。どうしたんだ。こんどはミキが、様子を見に外へ出た。すると数名の男たちが彼にかけよって殴りかかった。ミキの帽子がゆっくりと空に舞う。ヤバイ！何が起きているのかわからなかったが、身に危険が迫りつつあることは確かだった。うしろだ！河合さんとわたしは互に声をかけあい、奥の部屋へ逃げこんだ。ガラスの割れる音がやむと、数名がなだれこんできた。「カム、カム。」わたしたちの前に来て、手まねきをしながらいった。「ゴー、ゴー。」彼らとの距離を保ちながら、こちらもささやかに抵抗する。彼らは手を伸してきた。あっという間にわたしは、左腕をつかまれていた。河合さんは勇敢にも彼らの手をふりはらいながら、なおも抵抗している。しかし何か変である。多勢に無勢。どうみてもこちらに勝ちめはないはずなのに、彼らはいっこうにかかってはこない。それに考えてみれば、我々が危害を加えられる理由など何もないではないか。ここはすこし冷静になって、彼らのあとに従うことにした。

出るな！ 出口まで来て、河合さんは、外にでようとしたわたしを制し、リエゾンの名を呼んだ。

ミキはどこへ行ったんだ。ミキも、隊荷を積んだトラックも、ほかの隊員たちをのせたオートリキシャも、見あたらなかった。どこへ消えたのだ。

もういちどリエゾンの名を呼んだ。すると遠くのほうでミキが大きく手をふり、手まねきをしているのが見えた。無事だったのだ。頭にのぼっていた血が、すうっと引いた。隊荷を載せたトラックも、遠くに退避していた。だがオートリキシャは、金も受けとらずに逃げてしまったらしい。代りになるような車はもうどこにも走ってはいない。隊荷を満載したポンコツトラックだけが、我々に残されていた。

暴動の噂は本当だったのだ。首相の暗殺者がシーク教徒だったというだけで、シーク教徒はいま、ヒンズー教徒の目の敵になっている。この宿の主人も、シーク教徒であったために襲われたらしい。ミキは、ヒンズー教徒であるにもかかわらず、長い遠征で濃いヒゲをたくわえていたのでシーク教徒とまちがえられ、殴られたのだ。あごにヒゲをはやしたインド人は、シーク教徒しかいないのである。我々は巻き添えをくったらしい。ところで宿の主人はどうなったのだろうか。だれにもわからなかった。

全員無事？

暴動の対象がシーク教徒であることはわかった。しかし暴徒と化した連中は対象を選ばない。我々もその例外ではない。我々がいま窮地にあることは、明白である。

隊荷を満載したトラックは、さらに我々六名をのせて走りだした。とにかく最寄りのホテルへ駆けこまなければならない。しかし間もなく、こん

どはトラックが動かなくなった。スターターをかけても、カラカラと音がするだけでエンジンがかからない。故障である。泣き面に蜂とはこのことである。オールデリーに残してきた隊員三名のことが気がかりだ。そこで彼らは、我々のむかえをただ待っているのである。しかし最後の頼みのつなであるトラックを失ったいま、彼らと連絡するすべも失ってしまったのだ。暴徒たちでいっばいのトラックが、喚声をあげながらけたたましく、わたしたちの横を通りすぎていった。つぎはどこを襲うのだろうか。

故障したトラックの横で、我々が茫然としている間にミキはどこからか馬車一台とリキシャ二台をさがしだしてきた。いそげ！ 隊荷を焼かれてもいいのか！ 彼は、わたしたちにむかって叫んだ。急いで隊荷を移しかえる。馬車とリキシャは、隊荷と我々の重みでひっくりかえりそうであった。再度出発である。こんどなにかあると終しまいだ。祈るような気持であった。

5分ほどして、無事ヨークホテルにたどりついた。宿泊客のほとんどは欧米人である。インド人はいない。いや、少なくともシーク教徒はいないようである。ここなら安全だろう。みんなの顔から笑みがもれていた。

これで問題はひとつかたづいた。さてこんどは次の問題である。オールデリーで我々のむかえを待っている3名の隊員のことである。彼らのいるホテルに電話をしても通じない。タクシーあるいはその代りとなる乗物は、この暴動をさけてほとんど走ってはいない。かといって歩いていくには距離がありすぎるし、第一このホテルから遠く離

れることじたいが危険である。現時点で彼らと連絡をとるすべは、さしあたりみあたらない。ただ彼らが機転をきかして、この状況のなか、無事にYMCAにたどりつき、なおかつそこから動かすに待っていてくれれば別なのだが…。

しかしこの問題は意外にあっさりと解決した。我々は物事を悪い方へ悪い方へと考えていたらしい。YMCAまで様子を見にいった樋口と高原が、彼らをつれて帰ってきたのである。彼らは我々の期待どおりYMCAまでたどりつき、その前の道端にかがんで待っていたのである。とにかくこれで全員が、当初の予定どおりニューデリーに移動することができたのだ。だがしかしミキは、軍の宿泊施設に行くことはできなかった。彼には悪いが、我々は彼にもう少し一諸にいてほしかった。憶測

この暴動に対する我々のうけとめかたはさまざまであった。河合さんとわたしは、実際に暴動にまきこまれそうになったいきさつもあるので、かなり深刻にうけとめていた。だが一方では、事態をもっと軽くみる者もいた。この機に乗じた不良たちが金銭目当てにシーク教徒を略奪しているだけで、人命に危害をおよぼすようなことはないだろう、という見方である。たしかに暴動の主演は若者たちであり、襲撃にむかう彼らの顔にはときおり笑みさえ見え、怒り心頭に達したそれではなかった。どこか醒めたところがあり、余裕さえ感じられたほどだ。そうかも知れない。金目当ての騒動なのかも知れない。それなら理解できる。宗教対立というとらえどころのない理由だけで、日頃あれほどルーズでバラバラな彼らが一致団結し、

暴動という集団行動をおこすとはどうい考えられない。我々はつとめて現状を理解し、不安定な心をおちつかせようとした。とにかく外出を当分ホテル近辺に限るよう申しあわせ、事態の進展を見守ることにした。

暴動の爪跡

翌日、わたしはホテルのまわりを歩いてみた。辻という辻には、自動小銃で武装した兵士たちが配置され、警備にあたっている。すぐ裏には、高級ホテルがひと区画まるごと焼きはらわれており、路上にはガラス片や黒焦げた残骸が散乱している。あたりの店はみなシャッターをおろし、人通りはほとんどない。静まりかえったままである。ときおり兵士を乗せた軍用トラックが通りすぎ、静寂に緊張をあたえている。裏通りで身をかくすようにして新聞を売っている老婆から新聞を一部購入し、わたしは足早にホテルへもどった。

各紙面には暴動のニュースがでかでかとのっていた。家からむりやりひきずりだされて撲殺された者、列車ごと焼きはらわれて皆殺しにあった者たちなど、暴動の悲惨さをことこまかく物語っている。ショックだった。たとえそれが首相であったとしても、人間がひとり殺されたくらいでそれがために暴動がおき、幾人も人命がそこなわれるなどということは、いまの日本では考えられないことだ。暴動はすでにインド全土をおおいつくし、軍隊が出動してその慎圧にあたっているという。この大きな国はいま大揺れに揺れている。

11月3日、ガンジー首相の遺体はヤムナー川で茶^だ毘にふされた。この頃になると暴動もおさまり、まったく姿を消していたシーク教徒たちも街角に

あらわれだした。この暴動による死者はインド全土で五千人も、一万人ともいわれている。しかしなにごとにもなかったかのようにデリーの街は、すこしづつその本来の活気を取りもどしていた。問題の根が深ければ深いほど、表面上のとりつくりいは容易なのかも知れない。

解散

暴動の余韻がまだ完全に消え去らぬ7日、我々の隊は解散した。12月上旬に日本での再会を約束して、あるものはネパールへ、あるものはカシミール、ボンベイへと、それぞれ散っていった。



焼き払われたマリナーホテル

カシミール紀行

樋口 和生

隊荷の発送も無事に終え、11月9日、10日間も足止めをくったデリーをあとにする。

以前から訪れたいと思っていたカシミールへの旅だ。同行の坂井さんと共に、日が暮れてから駅へ行く。

初めてのインドの汽車は、まず、乗りこむのにひと苦労だ。降りて来る人も待たずに我先にと乗り込もうとする人々の、あのエネルギーのすごさ。立派な紳士らしき人までもが、赤ちゃんを抱いた女性を押しわけ、大きな金属性のトランクを車内にほうりこんでいる。僕ら2人は、ただただあっけにとられて見ているだけだった。それでも、どうにか自分達の席にたどりつき、ひと息つく間もなく、汽車は動き出した。

まわりには、軍人の家族連れやサラリーマン風の男、ぼってりとした腹をサリーからのぞかせてふんぞりかえっている金持風の女など色々な人間が居る。

同席の小さな女の子が熱を出して苦しそうだ。両親が心配そうにのぞきこんでいる。僕達は薬をとり出して、子供だから半分だけ飲ませるようにと手渡した。その時、母親の見せたあのうれしそうな顔。他人に対してこんなにも素直に喜びを表現できるものなのかと、こっちまでうれしくなってしまう。

そういうことがあってからは、周囲の人達が親切にしてくれ、チャパティを喰わないか、チャイを飲むか、どこから来た、日本で何をしていると

好奇心旺盛なインド人の暇つぶしの相手にさせられてしまった。

まわりの人達との話にも、汽車にも飽きてきた頃、終点のジャンムに着く。ここは、冬の間カシミールの州都になるというだけあって、なるほど大きな街だ。ここまで来ると、人の顔つきもデリーあたりとは大分ちがいが、色が白く、彫りが深い。言葉の響きも文字もヒンズー語とは全くちがったウルドゥー語だ。

ジャンムからは、立派な舗装道路をバスで山の中へ入って行く。広大な山の斜面に道路がどこまでも続いている。国境に近いせいか、兵隊のをせた軍用車がやたらと目につく。

途中一泊し、翌朝、夜明け前に出発。空が明るくなった頃、トンネルを抜け、眼下に広い谷が見えた。カシミール・バレーだ。白樺がはえ、山並みを背景にして畑が広がる美しい所だ。谷を下りきるとバスはまっすくに延びた並木道に出る。いよいよカシミールの州都、スリナガールに到着だ。スリナガールは、避暑地として夏はにぎわうらしいが、シーズンオフのため、思っていたよりも静かだ。ボートがそのまま宿泊施設になったハウス・ボートに宿をとる。スリナガールにある2つの大きな湖、ガル湖とナギン湖の岸辺には、このハウス・ボートが並んでいて、それを外からながめているだけでも結構楽しい。

あつらえて作ったカシミール・ポンチョを着こみ、貸自転車で一日かかって湖岸を一周したり、

シカラと呼ばれるボートで遊んだり、時間がゆっくりと流れていく。山登りのあとの休養には、うってつけの所だ。

ソファーにねころんで、湖にうつる夕焼けを眺めながら、お茶を飲む。ストーブの薪がはじける。こうやっている、スダルジャンの頂上に立ったのが、随分昔の事のように思えて来る。

出発前のあわただしさ、暑いデリーでの準備、馴れない高度での荷上げ、ルート工作。一次隊が頂上に立った時は本当にうれしかった。そして、全員登頂。色々な事が頭の中に浮かんでくる。同じような事を考えているのだろうか、坂井さんも横でぼんやりとしている。いつもは2人でバカな話ばかりしているのだが、たまにはこういう時もある。

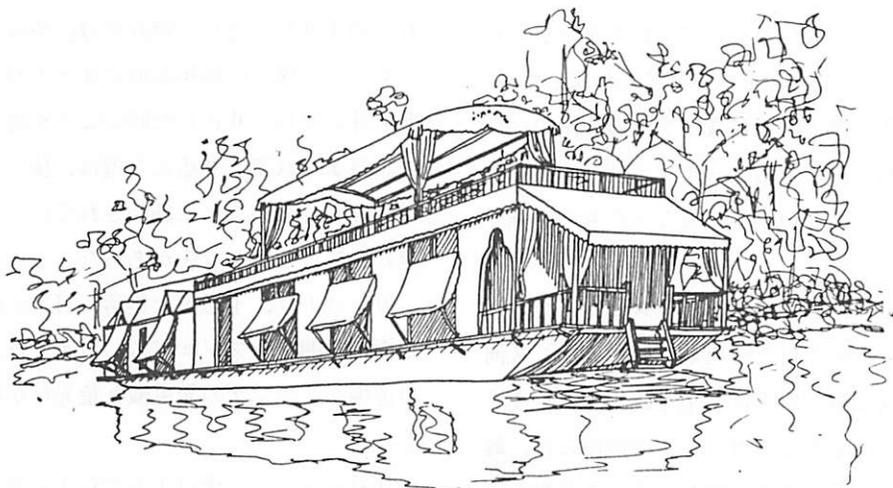
スリナガールで10日程のんびりした後、デリー

へとむかう。帰国の日が近づいているのだ。タージ・マハール以外さして面白い所もないアグラへ行ってから、デリーに帰って来たのが11月22日だった。

マドラスへ行って来た隊長の工藤さんと合流し、束の間だった旅の話をする。

隊で使ったエージェントに、預けてあった荷物をとりに行くと、姿をかくしていた社長のマンディップが出てきて、登頂を喜んでくれた。彼は、シーク教徒なので、ガンジー首相暗殺のあと、旅先のボンベイあたりにかくれていたらしい。

11月23日夜、マンディップが手配してくれた車で空港にむかう。いよいよインドともお別れだ。飛行機の窓から眺めると、親しんだデリーの灯がまたたいていた。



ハウス・ボート

思い出すままのインド

河合 範雄

ニューデリーは、半年前と何も変らなかった。ただ変ったといえば、4月のあの気も狂いそうになった暑さが、かなり和らいだことぐらいだろう。今回は、この街とも直ぐおさらばだ。そして緑の多いガンゴトリへ向うのだ。

4月のニューデリー。僕とTは、初めてのインドの匂いに緊張と興奮を覚えながらオールドデリーの安宿に荷を下ろしたことを思い出す。そして、一年中で一番暑いといわれる気温と、下痢と、バザールの氷でのオンザロックの飲み過ぎで一晩のたうちまわった僕は、アグラのエアコン付のホテルへと、逃げ出したのだった。思い出すのはオールドバザール。監獄のように狭く、ファンも無い部屋の中、汚いベッドに横になってうめきながら、窓から飛び込んで来るバザールの喧噪を耳にしてジャンキーの描いたようなサイケな落書をながめている自分でしかない。そして訪れたタージマールは、確かにその疲れをいやしてくれはしたが。

そして今回、僕はYMCAホテルの4階のベランダから、朝もやに煙るオールドデリーの方を眺めていた。そしてこの半年に失なったものを強く意識した。

4月のある日、その日はベナレスを発っていよいよネパールに向う日だったが、僕はガンジス河に面した、或る宿の屋上にて星を眺めながら夜を過し、朝日を出迎えた。ガンジスの彼岸には、難破した船、沢山のカラスの群れ、そして黄泉の国とも錯覚しそうなその遠い岸を歩いている何人か

の人間が赤く染っていた。僕はその日、安堵を覚えながらも何か心にひっかかりながら、一旦インドを去った。ベナレスからポカラまでは、丸2日のバスの旅である。早朝ベナレスを発ったバスは、インド大平原を一路ヒマラヤの山々を目指して車体を震わせながら走る。緑に満ちた山に近づくと生ずる安心感は、日本に似ているからか。こんな所にもと思われるほど急な斜面に作られた段々畑、そしてその間を縫って作られた路を何度か昇り降りして、最後に降り切った所がポカラだった。目前には確かなヒマラヤがあった。

ニューデリーを深夜に出発したバスは半年前とほとんど同じ眺めを車窓に映しだす。ただ違うのは、降りた所がウツタルカシであり、山を眺めに来たのではなく、登りに来たのであることだった。バスはさらに奥まで、本当に奥の奥まで、舗装された路を進む。そして終点には、やはりバザールがあった。僕は、何年か前にオートバイで九州の五ヶ荘の奥に入り込んだ時のことを思い出していた。気まぐれで入り込んだ道は、狭く急で、しかし信じられないことに舗装されていた。そして終点にはやはり小さな店があった。

ガンゴトリ、不思議な集落、日本の山あいの温泉街の雰囲気。ブジュバス、日本で言えば山伏しの道場か。ホンダの発電機と蛍光灯が場違いな気もしたが。

10月になって、僕は1人でC1に登った。氷河先端のスレートのモレーンの上に、C1の青いテ

ントがあった。テントの中は、ヒマラヤでも北海道でも変りはない。僕は、1人でお茶を沸し、飯を炊き、寝袋に入った。山の中で一人で泊るのは、10年ぶりだった。10年前、日高の稜線上で僕は1人でお茶を沸し、飯を炊き、天気図をつけながら13時間の行動の疲労の為にうとうとしていた。次の日は、札内岳をこえピリカペタンカールをグリセードで降り、6月の沢で初泳ぎをしながら帯広へと向っていた。そして10年後の今、再びテントの中に居る。スグルシヤンの頂上に立ちたいという意欲がわいてきた。

本当に翌日さらにC2に登った。C2からは隊員がルート工作をしているのが肉眼でもはっきりと眺められたが、行動は遅々としている。皆疲れているのだろう。

10月21日、C3に到着。徐々にのびてゆくルートを見上げていたがその日3人が頂上に立った。彼らは真暗になってから帰着した。

10月22日、岡島と2人で出発した。ポロポロの岩稜と硬い氷の尾根に張られたザイルにルート工作の苦勞を思う。意識ははっきりしているが体は徐々にけだるさが増して来る。14時30分、頂に立った。



水汲みの女

装 備

高原 昌也

(I) 個人装備

個人装備は、道内で使用する積雪期装備を用いた。各自アイスハンマーを持参したが、特に使用の必要はなかった。C1まではジャージに運動靴で十分であったが、夜間は冬並みに冷るので、やはりしっかりした冬の装備は不可欠である。

その他、各自がステンレス製の水筒(470ml)を持って行動した。

(II) 登攀装備

ルート工作用に $\phi 9$ m/mのクライミングザイル3本を用意した。ダブルで使用する必要もなかったので適当な本数であった。フィックスロープは、ダンライン($\phi 9$ m/m)とナイロンロープ($\phi 9$ m/m, $\phi 8$ m/m)で計2100mのうち1500mを使用した。これらは入手した写真等を参考にしきめたが、必要にして十分な量であったと思う。

ダンラインは主として雪面に、ナイロンロープは岩場にフィックスした。ダンラインは、強度に不安が残るが、軽量であるため、長く続く雪面などには、適当であろう。ダンライン、ナイロンともその3分の2を68mにカットした。これらは、キंकを戻しておかないと、出す時に苦勞する。特にダンラインはキंकが激しく、シュリングでしっかり結んでおく等の工夫が必要である。

もろい岩稜部のフィックスロープは、落石や鋭い岩との摩擦による切断が懸念されたが、登攀期間が短かったので不安感はなかった。

支点類は、各種をそろえたので、持っていく量は若干多目になった。スノーアンカー、ナッツ、ボルトは結局ほとんど使用しなかった。

ワイヤーバジゴは、 $\phi 5$ m/mのワイヤーにアルミ丸管($\phi 2.5$ m/m, 厚さ2 m/m, 長さ250 m/m)を通し、ワイヤーストッパーで固定したものを1台と、既製品を1台、計2台を用意した。これはC3上の岩部に固定し、極めて有効であった。また、現地でのナワバジゴ作成用に穴をあけたアルミ丸管も30本持参した。

スノーバーは、3 m/m \times 40 m/m \times 40 m/m \times 650 m/mのものを作製し、ノコ歯を入れた部分を外側に曲げて、雪との抵抗が大きくなるようにした。軽量化のため、2 m/m厚

のものの方が良いと思う。

(III) 露営装備

BCに夏用テント、リエゾン用テント、4人用を張り、4人用テント2張と、3人用テントをC1以上で使用した。これらは適当な数であった。又、キッチン天井にブルーシートを使って、なかなか快適にできた。

ストーブは、日本から石油ストーブ4台、キャンピングガスストーブ2台と、現地製品3台を用意した。ガスストーブはC3のみの使用とし、日本から持参の4台をC1~C3で使った。現地製ストーブの性能は、やはりあまり良くないが、思ったよりも長持ちした。また、国産の石油ストーブ(マナスル)は高度によって、火力がおちるが、C3においても十分に機能した。石油フィルターを使用し、予備も用意していたので心配はなかったが、やはり神経をつかう装備である。

石油は99ℓ用意したが、BCやC1で水がとれ、マキストーブを使ったりしたので約半分近く余った。又、石油用のポリタンクは、現地製のものは不安のあるものばかりで、日本製が良い。

炊事用具は、普段の山行で使用しているものをそのまま用いた。圧力ガマは、2台用意し、BCで使用したが、有効であった。チャパティ用の道具やフライパン等、やや用意過ぎの感があった。

雪洞を掘る事を考え、ノコやスコップも持っていったが、ほとんど使わなかった。

(IV) その他の装備

梱包材は、日本からの輸送にプラパールを用い、キャラバン中はこれに加えて、麻袋、ブルーシート袋、ショイコを使った。破損の心配のないものは、麻袋、ブルーシート袋に詰めても問題はない。麻袋はオールドデリーで安価に入手でき、今回のキャラバン位ならこれで十分である。

プラパールは、袋類の梱包材に比べて重いのが欠点であるが、やはり空輸の事等を考えると信頼できるものであり、良かったと思う。

また、今回は問題にならなかったが、防水対策はしっかり施すべきであった。

通信器は、ナショナル製の500 mW, 2バンドのものを

いた。性能は良く、故障もなかった。電池の消耗も予想したほど激しくなかった。余った電池は、全てカセットから流れる流行歌となった。

高度計は正確ではなかったが、ある程度の目安となり、気圧の上下が解るので、天候の予測にも役にたった。

タイプライターは、再輸出のパッキングリスト作成に使用したが、デリー市内の専門店に頼む事もでき、不用であった。

リエゾンの装備は、隊員と同様のものを支給した。しかし、ポーターへは支給しなかった。

◎現地購入品は、別表の通りである。デリーには、スーパーマーケットもあり、便利であった。ストーブは購入時にその場で点火してもらった。かなり欠陥品があるので、十分な点検が必要である。予備品としては、パッキン、マンドリン、ポンプやヘッドなど、一通りのものがそろろう。

竹は、日本の青竹と違い、やや重い丸棒といった様なものがオールドデリーで手に入ったが、切断して、ベグにしたり、キッチンや夏用テントのポール等に役立った。

(I) 登攀具

○フィックスロープ (φ9 m/m ダンライン, 200M)	7
○フィックスロープ (φ8 m/m ナイロン, 200M)	3
○クライミングザイル (φ9 m/m 40 M)	3
○クライミングザイル (φ9 m/m 50 M)	2
○シュリング (φ6 m/m 1.5 M)	130
○ロックハーケン (各種)	68
○アイスハーケン (各種)	58
○スノーバー	46
○スノーアンカー	26
○ナッツ	11
○ボルト	36
○滑車	2
○ユマール	9
○カラビナ	60
○ジャンピングセット	2
○ナワバシゴ用アルミ管	30
○ワイヤーバシゴ (10M)	2
○ストック	3
○アブミ	6
○アブミプレート	8

(II) 露営用具

○4人用テント (マイクロテックス)	3
○3人用テント (マイクロテックス)	1
○2人用テント (マイクロテックス)	1
○夏用テントセット	1
○スーパーツェルト	2
○シート	12
○ブルーシート	6
○スコップ (ジュラ)	3
○タワシ	3
○ナベ (大小1組)	3
○缶切り	1
○圧力ナベ	2
○ポリタン (各種)	14
○石油ポンプ	1
○メタ (20コ入)	20
○ストーブ (マナスル)	3
○ストーブ (ホエブス)	1
○ストーブ (インド製)	3
○ストーブ (ガス式)	2
○ガスカートリッジ	15
○ジョーゴ	4
○100円ライター	50
○ノコギリ	3
○石油	99 ㄷ
○ローソク	40
○フライパン	1
○お玉	1
○洗剤	3
○竹	50
○インド国旗, 部旗	2
○チャパティ炊事具	1 set
○石油ランプ	2
○リエゾン用食器	2
○麻ひも	3 束
○バネバカリ (30kg用)	1
○双眼鏡	1
○万能ナイフ	1
○ふきん	6
(III) 予備品, 修理具	
○ビニルテープ	6

○針金	32M	○薬品	
○ドライバー	2	○ブラパール	17
○キリ	1	○麻袋	15
○プライヤー	2	○ブルーシート袋	12
○ヤスリ	1	○P. Pバンド	20M
○リベット	10	○ショイコ	3
○接着剤	2	(V) リエゾン支給品	
○ストーブ修理具	2 set	○マットレス	1
○金ノコ	2	○雨具	1
○アイゼン	1	○トレーナー	1
○ピッケル	1	○ズボン	1
○スコップネジ	3	○カッター	1
○オーバーミトン	1	○セーター	1
○ロングスパッツ	1	○ジャンパー	1
○オーバーズボン	1	○オーバーズボン	1
○ジャンパー	1	○登山靴	1
○シュラフ	1	○靴下	1
○日出帽	2	○オーバーミトン	1
○機械油	1	○下着	1
(IV) その他の装備		○サングラス	1
○赤旗	30	○ロングスパッツ	1
○トランシーバー (500 mW)	4	○ヘッドランプ	1
○高度計 (7000M計)	1	○シュラフ	1
○ラジオ	1	○アイゼン	1
○電卓	1	○手袋	1
○双眼鏡 (×8)	1	○サブザック	1
○タイプライター	1	○ユマール	1
○乾電池 (単3アルカリ)	200	○ナイフ	1
○ 〃 (単1アルカリ)	12	○羽毛服	1
○ガムテープ	8	○ゼルプスト	1
○ポリ袋 (各種)	70	○ベルト	1
○トイレットペーパー	40	○コップ	1
○8m/mカメラ・フィルム	1 set	○環付カラビナ	1
○ラテルネ (大)	1	○ピッケル	1
○筆記具 (マジック)	3	○ヤッケ	1
○輪ゴム	3		

食糧

宮本 真

食糧は基本的には我々が国内山行で使っているものに、長期にわたる海外遠征における高度などの因子を考慮した。つまり、

- (1)簡単に調理できること。
- (2)高カロリー、高タンパク質性であること。
- (3)軽量であること。
- (4)廉価であること。
- (5)美味であること。

別表のような食糧を持参したが、特に留意した点を列挙する。

(1)調理

高さを考え、米は自前で α 化した。市販のものに劣らないものができた。また、めん類は全てカップ製品の中味を使用した。

(2)高カロリー、高タンパク質性

成人男子が登山をする際、一般に3500キロカロリー、タンパク質80グラム(うち、動物性タンパク質30グラム)が必要とされているが、以上の条件を満たすようカロリー計算をした。しかし動物性タンパク質は20グラム程度しかとらなかった。また、高所登山では一日に3~4リットルの水が必要であるが、いつも水の摂取を心がけている必要がある。このため各自テルモスを携帯した。なお、ビタミン類については、ビタミン剤を服用することで対処した。

(3)軽量

乾燥野菜、乾燥肉、乾物を使用した。鳥の乾燥肉で厚さ5ミリ程度のものを使用した。もどりが悪く圧力釜で長時間煮なければ食べられなかった。乾燥ニンジンももどりが悪く、5ミリ角程度の大きさにするのが良いと思う。

(4)食糧費

今回は各食糧品会社のご好意による現品寄付品を使用でき、食糧費はかなり安く抑えることができた。海外遠征では、空輸の費用を常に考える必要がある。つまり、空輸する食糧をなるべく減らすということである。ビスケットやチョコレートなどは、日本よりもデリーの方が高価であるが、輸送費が1kg約1100円かかるので現地調達にした。

(5)その他

長期にわたる遠征であり、ベースキャンプ用に登山とし

ては少々贅沢と思われる食糧も用意した。

食糧の概要

持参した食糧は四つに大別できる。

- (1)キャラバン食
- (2)ベースキャンプ食
- (3)高所キャンプ食
- (4)行動食
- (1)キャラバン食

当初キャラバン用とBC用を一緒に考えていたが、実際はキャラバン中における朝夕の忙しさから別にした。つまり高所キャンプ食とBC食の混合のようなものである。主食類は現地食であったが、副食はインスタントスープに野菜を入れて煮こんだり、お茶漬けなど日本から持参したものを多く使用した。

(2)ベースキャンプ食

海外遠征の経験のない食糧係がまず頭を痛めるのは、現地食の量であると思う。特に調味料とかチャパティ用の小麦粉などは名前を聞くのも初めてなものばかりである。今回はリエゾンオフィサーが経験豊富であったため、かなり助けってもらうことができた。現地食は220人日分用意したが、丁度良い量であった。現地米は炊けた量が日本米よりも多いので注意しなければならない。1.2倍程にはなると思う。

ガンゴトリ山群がヒンズー教の聖地であるため、殺生は禁じられており、山奥に進むにしたがって卵さえ手にはいなくなるだろうことは十分予想できた。そのためBC用の粉ミルクを多めにし、粉末ヨード卵と乾燥肉を持参した。乾燥肉は前述のように不評であったが、粉末ヨード卵で作った玉子焼は好評であった。

(3)高所キャンプ食

朝食は全てめん類でまかなった。夕食は各種の雑炊を主体として、雑煮やジフィーズなどでバラエティをもたせた。しかしジフィーズは水分補給のためスープやみそ汁を作らなければならないので手間がかかり、あまり美味ではなかった。

(4)行動食

当初、キャラバン、BCではチャパティでまかなおうとしたが、毎朝チャパティを作るのは時間がかかり無理であ

った。結局、ビスケットを主体にチョコレートや干果実、ナッツ類、キャンディを各自持ち歩くようにした。

梱包

高食キャンプ食は4人の4日分の主食とお茶セットを一つにパックした。隊は二人、三人、四人パーティーで動く可能性を考えていたが、実際には二人、三人パーティーで動くことが多かった。今回のような小さな隊では食糧は細かくパッキングしない方が良いと思う。大まかにパッキングして、あとは隊員の体調に合わせるのがよい。一袋四人分の食糧を三人で食べた残りの一人分(1.5人分はあったよう

に思う。)は食の進まない二人パーティーが食べたり、またラーメンといっしょに米を煮たり、チャーハンを作る時に増量するなど、無駄なく使った。調味料セットと現地調達砂糖、紅茶は各キャンプに備え付けた。

全般に遠征を通じ食糧に関しては、計画通り進めることができた。これまで小人数遠征隊の食糧に関する経験がかなり蓄積されており、それを参考にすることができたということもあるが、最も大きな理由は、隊全体に在り合わせの物を工夫して無駄をせず美味なものを作る雰囲気があったためと考えている。

食糧リスト

品名	～B.C	C1～	備考
——国内調達——			
α 米	1280g	12160g	160g/人回
ラ — メ ン	600	9600	} 150g/人回カップものの中身。 計画段階では朝食をすべて、これらめん類でまかなった。 キャラバン中の病人用である。
う ど ん	0	2400	
そ ば	300	2400	
ス パ ゲ テ ィ	600	4800	
モ チ	0	3750	190g/人回 主食として雑煮で食べた。
ジ フィ ーズ(各種)	2190	6400	200g/人回 不評。
ラ ー メ ン ス ー プ	6袋	96袋	
ミ ー ト ソ ー ス	3袋	18袋	レトルト。
ル ー ミ ッ ク	1袋	2袋	1袋5人分。
茶 漬 け	24袋	24袋	
うどん(そば)スープ	3袋	78袋	
マーボ豆腐の素	2袋	24袋	レトルト。
カマメシの素(各種)	2袋	15袋	レトルト。
メキシカンシチューの素	1箱	2箱	1箱5人分。
ビーフシチューの素	0	2袋	1袋7人分。
ボルシチの素	1箱	2箱	1箱5人分。
乾 燥 わ か め	0	130	} あまり使われなかった。
干 し い た け	130	230	
干 き く ら げ	0	200	
高 野 豆 腐	40個	48個	有効なたんぱく源だがあまり使われなかった。
粉 末 ヨ ー ド 卵	1250	800	結局全てB.C.で使用した。
乾 燥 野 菜	2600	2400	ニンジンのもどりが悪い。
乾 燥 肉	1700	1600	一切れが大きく、もどりが悪くC ₁ 以上では不可。
インスタントみそ汁	21袋	24袋	

インスタントスープ	13袋	24袋		
サラミ	3本	32本	重いが、これを食べると元気になる。	
プリンの素	7箱	7箱	}	
ゼリーの素	10箱	7箱		デザート。
チーズケーキの素		2箱	}	
コーヒーマ	400	1280		10g/人日
ココア	1400	2560		20g/人日
クリーミングパウダー	375	1920		15g/人日
緑茶	300	512	4g/人日	1回に飲む量が大いのでだいたい、これで良いが緑茶が足りなくなった。
干モモ	1000	3000	}	
干リンゴ	1000	3000		行動食用。干リンゴは包み紙がはりついて食べにくく、不評。干バナナはまずい。
干バナナ	1000	3000		
あめ(各種)		1920	ビタミンC入りのもの。	
干鰯		2730	おやつ。	
粉末ジュース		1000	行動中用500cc/人日。	
スポーツドリンク	12袋	50袋	これを飲むと元気になる。	
梅干し	5箱		好評。C ₂ まで持ち上げる人もいた。180g/箱	
ふりかけ	20袋		}	
粉末しょう油	1100			好評だが、これ程使えない。
粉末みそ	1100	300	最後の味付け。	
コンソメ	900		不足した。粉末みそでうまいみそ汁。用途多数。	
ほんだし	350		1袋5人分。	
ワカメスープ	15袋		}	
たくあん	1050			すぐになくなった。
つけもの	2100			
塩か	480		}	
のり佃煮	600			高所ではうまく作れない。
ひやむぎ	4500		1箱65g	
インスタントクリーム	2箱		好評	
こんぶ茶	150	128個	行動食用。ペビーチーズ1個/人日	
チーズ	40個	2本	お茶漬けのとき、いれると美味。	
わさび	2本	2本		
とうがらし	0	2本		
ラー油	0	3本	不足。チャーハン・ヤキソバ・ヤキウドンに使う。	
白玉粉	500		おしるご用。	
すしのこ	5袋		ちらし寿司用。	
小豆あん	900		おしるご用。	
みかんかんづめ	2本		病人用。インドにはない。	
チャーハンの素	6袋		好評。	
のり	20枚		ちらし寿司用。	
さくらもちの素	300		使わず。	

か ん び よ う 30g
す し の 巻 1枚

—現地調達—

米 25kg
ア タ 30
食 用 油 6.6
塩 5
砂 糖 23
マ サ ラ 2
ダ ル (各 種) 15
タ マ ネ ギ 15
ジ ャ ガ イ モ 15
カ リ フ ラ ワ ー 3
カ ボ チ ャ 大1個
ト マ ト 2
イ ン ゲ ン 豆 0.5
ラ イ ム 20個
オ レ ン ジ 10
リ ン ゴ 10
バ タ ー 3
チ ー ズ 5缶
紅 茶 1
粉 ミ ル ク 7.8
ジ ャ ム 4
ビ ス ケ ッ ト 4
肉 缶 詰 11.3
果 物 缶 詰 1.8
ソ ー ス 類 2.1
蜂 蜜 1.2
ス バ ゲ テ ィ 1.2
チ ョ コ レ ー ト 1.5
オ ー ツ 2.9
ボ ル ビ タ 2.4
コ ー ン フ レ ー ク 0.8
粉 ジ ュ ー ス 5.4
マ カ ロ ニ 3.2
キ ャ ン デ ィ 3.0
ピ ー ナ ッ ツ 4.5

0.75kg

16

1.5

ちらし寿司用。
〃

飯けた量は日本のより多い。
小麦粉。チャパティーを作る。
植物油

ザラメ、日本のよりあまい。
カレーの材量
豆。たんぱく源。

ウツタルカシで購入。
この他のものはデリーで購入した。

チャパティー用

チャパティー用
行動食用。120g/人日
うまくない。

日本のミツマメに似ている。
ケチャブなど。
チャパティー用
まずい。

行動食用。高い。
朝食に便利。
調整ココア。
朝食に便利。

うまくない。
使用しなかった。
トフィーキャンディ。美味。
マサラがまざってからい。

渉 外

樋口 和生

輸 送

日本からインドへ別送品として送った隊荷は、総重量414.5kg。札幌―デリー間の運賃は、1kgにつき、1136円だった。

通関等は、日通航空札幌支店に依頼し、我々は、書類を揃えるだけで良かった。

隊荷の発送に必要な書類は、次の通りである。

1. パッキングリスト…各カートン毎のものと消費物資、非消費物資にわけたもの。
2. 全隊員のパスポート（P.2～5）のコピー。
3. 税関支署長宛の「航空手荷物別送品の別送許可願い」…今回は札幌税関支署千歳出張所長宛
4. 登山計画書（和文）
5. 荷送り人の航空券のコピー…代表一人分で良い。

HJ発行の「インドヒマラヤの手引き」には、この他に、国外持ち出しの米の量を明記した書類と外国製装備品の申告書があるが、今回は、持ち出す米は、すべて乾燥米にしたので前者は不用。また、後者は、装備品の中に、真新しい、あるいは高価な外国製品が無かったので、不用であった。

パッキングリストを作る場合、当然のことながら2種類のパッキングリストの装備の数量、値段は、厳密に合致していなければならない。

また、非消費物資のリストには、トランシーバーなど、必要最少限の物だけを入れ、装備の大部分は消費物のリストに入れておいたほうが良い。実際、持ち帰るつもりで装備でも、山の中では、アクシデントのために失なうかもしれない、もし非消費物資のリストに入れてしまうと、インドでパスポートにその品名を記入され、出国時にそれらが揃っていないと、トラブルの元になる。トランシーバーは、非消費物資のリストに入れておかないと、通信省からの使用許可証が交付されず、インド国内では、使えないことになる。

日本から持ち出した隊荷の総重量で、別送品として送ったもの以外は、手荷物として持ち出そうとしたが、個人装備と合わせると、一人当たり相当な重さになった。このため、成田空港で、90数kg分の超過料金約23万円を払うはめになった。

エージェント

今回は、北大ワンダーフォーゲル部OB、大内氏のご紹介により、Ibex Expedition を使うことにした。

この社長は、1980年に大内氏の遠征隊のリエゾン・オフィサーをしており、インドのトップクライマーでもある。

大内氏のご紹介もあって、今回は、Ibex とかなり安い料金で契約することができた。

契約内容は、以下の通りである。

1. デリーの空港からホテルへの隊員の送迎と隊荷の輸送。
2. 出国時における別送隊荷の通関
3. トランシーバーの通関
4. デリー到着後のIMFとのブリーフィングとIMFへの交通
5. 買い物の手伝い
6. デリー到着時のオリエンテーション
7. リエゾンオフィサーとの引き合わせ

以上7項目の契約金は、360ドルであり、日本から半額の180ドルを送り、残りはデリーで支払った。また、デリーからガンゴトリまでのバスのチャーター料は、6500ルピーであった。

インドには、登山関係のエージェントは、他に数社あるようであるが、Ibex を見るかぎり、かなり手際良く、しっかりとした仕事をやってくれるようだ。

航空チケット

今回のインドへの渡航には、インド航空の東京―デリー往復、一年オープンのチケット（218000円）を利用した。他に、バンコクで乗りかえる安価なチケットもあったが、バンコクでの滞在費を考えると、直行便のチケットとの価格に大差がないこと、隊員の大部分が外国は初めてであり、登山前の不必要な、精神的あるいは体力的消耗を、できるだけ少くしようと考え、少々高くはあったが、上記のチケットを使うことにした。

査証

登山のためにインドへ入国する際は、Entry Visa が必要である。これは、旅行で入国する時に必要な、Tourist Visa とは異なり、在日インド大使館からインド本国に照会され

た後に交付される。登山の本申請をした後に、インド大使館に Visa を申請し、通常は、2～3 カ月で交付されるようである。我々は、比較的速く申請後58日で Visa を取得することができた。身近に、出発間際になっても Visa の降りない遠征隊を見て居たので、多少心配したが、登山に行く地域の、政治的な問題がからんでいるようだ。

保 険

今回は、全隊員にホーム保険会社の海外山岳保険をかけた。この保険は、他の傷害保険に比べると、死亡時等の保障額は少ないが、凍傷の治療費や、ヘリコプターチャーター料も含めた救援者費用等の保障が受けられる。

緊急時の対策

海外遠征の場合、緊急時の登山本部への連絡は、時間がかかる。連絡の方法として、電報、電話などが考えられるが、インドという国の事情を考えた場合、それ程迅速であ

るとはいえない。そこで、今回は山岳部長を通じデリーと札幌の両方に支店のある、ある企業に、緊急連絡の時にテレックスを使わせていただくようお願いした。事故がおこった場合登山とは全く関係のない方に迷惑をかけるわけで、恐縮であったが、幸い快諾していただいた。

address

Indian Mountaineering Foundation: Benito Juarez,
Anand Niketan Road, New Delhi-110021, India

Ibex Expedition Pvt., Ltd.: G-66, East of Kailash, New
Delhi-110065, India

Mr. Jagveer Singh Negi: "Mountain Guide", Hotel
Bhanderi, Uttarkashi, U. P.-249193, India

Express Travship Services: UB-10, Surya Kiran
Bldg., Katsurba Gandhi Marg, New Delhi-110001

医 療

河 合 範 雄

今回の遠征において携行した医療品は、別表の通りである。あまった医療品は、現地の医療施設に寄附する方針で、各製薬会社からご協力いただいた医薬品をできるだけ携行したので、必要以上の量となった。

主要医薬品とその使用目的は、つぎの通りである。

- 1) 一般的下痢症状に、止痢剤、整腸剤。(タンナルビン、アドリルビン等)
- 2) 登山中の下痢症状。(フシロベリン)
- 3) 食物の変化に対しての整腸剤(各種胃腸薬、消化酵素フェスタール)
- 4) 一般的発熱、風邪症状用(PL顆粒、イングシンSP、メチロン、ルルゴールド等)
- 5) 高地での咳、咽喉頭乾燥感防止剤(プロチン、コデイン、ルルトローチ)
- 6) 高山病症状、頭痛、微熱など。(PL顆粒、セデスG、アスピリン)
- 7) 気管支炎症状用(補液と抗生剤の静脈注射)
- 8) 高地での浮腫用(ラシックス、アスパラK)
- 9) 高地での皮膚の角化、凍傷防止用(ユベラクリーム)
- 10) 外傷用(アクロマイシン軟膏、ゲンタシン軟膏)
- 11) 唇の日焼防止剤(リップクリーム)
- 12) 皮膚の日焼防止剤(硼酸亜鉛華軟膏)

13) 筋肉痛。(ゼラップ、ヘルベックス湿布薬、ヒルロイド軟膏)

14) 軽度外傷用(救急絆)

15) 高地でのビタミン補給。(ハイシー、アリナミン、パンピタン)

B. C. より上部では、①高山病への対応、②重度外傷への対応、③重度感染症への対応、④ビタミン不足、消化不良等一般生活への対応が主な考慮すべき項目となるものと思われる。このうち④は、さほど問題とはならず、また、②、③もアクシデント的に発生するものであるから、状況に応じて対応するしかない。その為、各種補液、静脈注射用抗生剤各種、外科的止血器具、静脈注射用ステロイドは必須のものとなる。

しかし、①の高山病への対応は、各登山隊において、避けては通れない問題である。筆者は、ドレフェカル遠征の際の経験をふまえて対応したが、幸いあらゆる好条件に恵まれ治療を要する者が出なかった。

今回の処方薬を薬剤の投与から患者への対応策まで総合的に述べてみたい。

1) 最良の処置は、低い場所に降りることである。筆者の経験した高山病の初発症状は頭痛だったが、何はさておき一つ下のキャンプまで駆け下りた。嫌悪感も初発症状の

一つであるが、行動時の疲労と重なってわかりにくい。

2) 食欲不振の隊員には、希望する食物を作って与えることが肝要。明日は我が身と心得る。

3) 頭痛、不眠、悪心の隊員には、我慢せず積極的に薬を投与する。もちろん副作用には充分注意すべきである。高山病の全身状態にかくされて、副作用の自覚症状がわかりにくくなる可能性もある。筆者の経験では、一晩休ませると症状は好転することが多く、そのため、現症をセデス、PL顆粒、アスピリン等の薬でおさえて安眠させるようにした。

4) 安静、休養をとる。これには反対意見も多いと思われる。1)と重複するが、より低いキャンプに降りて休養することも、長丁場の登山において必要と考える。

また、「好きなものを食べて、薬を飲んで、暖くして眠ると、明日は治っているよ。」と隊員に自信を持たせ、安心させる。素直に寝袋に入る隊員に対する心理的効果は大きい。

5) 顔面浮腫は、きわめてありふれた高山病症状であるが、浮腫に対して直ちに利尿剤を投与せず、全身状態を考

えて投与する必要がある。今回も、ほとんどの隊員が「満月様顔」を呈したが、登頂後B、Cに戻るとやがて1名をのぞき全員が回復した。なかなか回復しなかった1名は、ラシックスの経口投与を行ったが、浮腫はなかなか回復せず、低地に戻るまで続いた。しかし、それ以外の全身状態については、特に問題となるところはなかった。血清電解質を測定できない場合は、ラシックスの安易な使用はしない方がよいと考えている。

今回の医療計画は、1979年のカラコルム・クンヤンチッシュ遠征の際に準じた。

山域にもよるが、携行医薬品等については、実際には今回の携行量の $\frac{1}{2}$ で足りたと考えている。先述のように、現地への寄附も含め、常に最悪の事態を考え、必要以上の医薬品を携行した。

気軽に現役が出かけるこのたびのような規模の遠征では、医薬品のリストの作製が必要と考えられる。

最後に、遠征にご援助いただいた製薬、医療品各社並びに関係者の方々に心から謝意を表する次第である。

医薬品リスト

総合感冒剤			
品名	量・規格	メーカー	備考
ルルゴールド	100 tab	三共	高山病初期症状に有効
B L 顆粒	100 P	シオノギ	
ダンリッチ	100 tab	住友	
解熱・鎮痛・消炎剤			
セデス G	100 P	シオノギ	街での発熱に一度使用 高山病に有用
バファリン	100 tab	万有	
グーゼン	100 tab	武田	
インダシン SP	50	万有	
メチロン	20 A	第一	
ペントジン	10 A	三共	
アスピリン	300 tab	バイエル	
鎮咳・痰・トローチ			
プロコデ	40 T	三共	高山での乾燥した空気に
ヒッルボン	36 T	田辺	
ルルトローチ	240 T	田辺	
胃腸薬・消化酵素剤			
三共胃腸薬	300 tab		BCや各Cにおいて

武田胃腸薬	300 P		個人的に使用させた
正露丸	300粒		
フェスタール	100 tab		
ビオクルミン	300 tab		
制酵・抗コリン鎮痛剤			
ストロカイン	100 tab	エーザイ	
ブスコパン	100 tab	田辺	
〃	10 A		
制吐剤			
プリンペラン	10 A	藤沢	
止痢剤			
ダンナルピン	300 g	武田	医大薬局にて1gずつpackingしていただいて
フェロベリン	300 tab	ロネボウ	
軟下剤			
ソルベシ	30	小野	
テレミンソフト	20 sp	フナイ	全く使用せず
レシカルボン	20 sp	ゼリア	
痔疾剤			
シェリプロクト	20 sp	シエリング	
ルブリテック	20 sp	田辺	
鎮静・睡眠剤			
ホソゾン	100 tab	山之内	
〃	10 A	〃	
ネルボン	100 tab	三共	
プロバリン	30 tab	日本新薬	
ベンザリン	30 tab	シオノギ	
ビタミン剤・末梢血管・拡張剤			
ポボンS	200 tab	シオノギ	B C各Cにて適時使用する
ハイシー	300 g	武田	
ユベラN	100 tab	エーザイ	
アリナミンF	200 tab	武田	
パンピタンS	200 tab	武田	
化学療法剤			
バクター	100 tab	シオノギ	街、山中での発熱等に適時使用、ほとんどは隊の解散後の個人薬となる。
ペントレックス	100 tab	万有	
ヤマシリン	100 tab	山之内	
ケフラール	100 tab	シオノギ	
ダラシン	100 tab	UJ	
ミノマイシン	50 tab	レダリー	

ビクシリン	80 tab	明治	
ペントレックス	10 V	万有	
パンマイシン	5 V	明治	
ケフリン	10 V	シオノギ	

利尿剤

ラジックス	30 tab	ヘキスト	高山病の浮腫に使用するも著効なし
アスパラ K	24 tab	田辺	
フジックス	5 A	ヘキスト	
ダイアモックス	5 V	レゴリー	

救急医薬品

ネオフィリン M	10 A	エーザイ	
ジゴシン	50 tab	中外	
ノルアドレナリン	10 A	三共	
ボスミン	10 A	第一	
ソルコーテフ	250 mg 5 V	UJ	
〃	500 ng 5 V	〃	
デカドロン	10 V	万有	

補液

ラクテック	500 ml 3本		
〃 G	500 ml 3本		
5 % D	500 ml 3本		
マルトース 10	〃 1本		
生食	〃 2本		
蒸留水	〃 1本		
生食	20 ml 20本		
20 % D	20 ml 20本		

麻酔薬等

1%キシロカイン	2本	藤沢	
4%キシロカインスプレー	1本	〃	
キシロカインゼリー	2本	〃	

その他

ゼラップ	20 P	三共	ポーターなどの打撲に
ベルベックス	15 P	第一	

軟膏・点眼剤

レスタミン	2本	コーワ	
アクロマイシン	10本	レダリー	
リンデロン V G	10本	シオノギ	
ヒルロイド	20本	マルホ	
コベラクリーム	8本	エーザイ	

ゲ ン タ シ ン	10本	シェリング	ポーターの創に
リ ッ プ ク リ ー ム	10本	エーザイ	
ク ロ マ イ 点 眼	5本	三共	
サ ウ テ ゾ ー ン //	10本	サンテ	
フ ラ ビ タ ン //	10本	山之内	
ア イ ロ タ イ シ ン	5本		
ホ ウ 酸 亜 鉛 軟 膏			日焼止めに

消毒剤

オ キ シ フ ル	500 cc	三共	アネロイド型 個人持ちとする 大きさの異なるものの個人持ち 滅菌剤のもの 個人持ち 耳鼻科詰所にて滅菌パックしていただいた
イ ソ ジ ン	250 cc	明治	
ヒ ビ デ ン	250 cc	住友	
オ ス バ ン	500 cc	武田	
ア ル コ ー ル 70 %	500 cc		
ヒ ビ ラ ン ク リ ー ム	3本	住友	
聴 診 器	1ケ		
血 圧 計	1		
体 温 計	10		
検 尿 紙	1ピン		
救 急 絆	多数		
ガ ー ゼ	50 P		
包 帯			
包 帯 止			
ア マ ン 油 紙			
絆 創 膏	布製, プラスチック製など	適量	
脱 脂 綿			
眼 帯	10		
ギ ブ ス 包 帯	3組		
シ ー ネ	足, 指用など 適量		
注 射 筒	50ケ		
注 射 針	50本		
ベ ン ノ ー ラ	15玉		
翼 状 針	10本		
輸 液 セ ッ ト	10組		
ネラトノカテーテル	6本		
エ ア ウ エ イ	2ケ		
気 管 チ ュ ー ブ	3本		
マッキントッシュ喉頭針	1ケ		
ア ン ビ ュ ー	1組		
デ イ ス ボ メ ス	2本		

〃 替 刃	2箱	
無 鋼 鋸 子	1	滅菌剤
有 鋼 〃	1	〃
ハ サ ミ	大1	〃
〃	小1	〃
縫 合 糸	3-0	ナイロン
針	若干量	
針 付 糸	2種No 3 × 5 ² No 4 × 5 ¹	
コップフェル 鉗 子	1本	滅菌剤
止 血 〃	1本	〃
モスキート 〃	1本	〃
ミ ラ ー	2本No 1 No 3	
ゴ ム 手 袋	5袋	手術用
経鼻胃カテーテル	5本	

会 計

坂 井 忍

収 入 (単位：円)

隊員個人負担	3,044,259
寄 付	2,808,640
雑 収 入	78,000

計 5,930,899円

支 出	国内分	国外分	小 計
渡 航 費	1,989,720	—	1,989,720
輸 送 費	772,850	468,250	1,241,100
装 備 費	204,090	32,592	236,682
食 糧 費	58,072	98,175	156,247
代理店経費	88,200	—	88,200
ポーター等雇料	—	277,410	277,410
国外滞在費	—	606,837	606,837
登 山 料	171,250	—	171,250
隊員保険料	198,240	—	198,240
事務通信費	300,000	45,213	345,213
報告書作成費	620,000	—	620,000

支出総計 —

小計 4,402,422 1,528,477 5,930,899円

国内支出

1) 輸送費

少々高いが日通の航空便を利用した。札幌通関で、デリーまで1kgあたり約1,100円。デリーからの返送も1kgあたりほぼ同額であった。また、出国の際、成田空港で手荷物にExcess Chargeをかけられ、予定外の出費となった。これは非常なショックであった。

2) 装備費

テントは寄贈品を使用。出費のほとんどは登攀用具やリエゾン・オフィサー用の装備に対するものである。

3) 食料費

BCより上で使用する分を国内で用意したが、主食のほとんどは寄贈品によった。

4) 代理店経費

私共は代理店としてデリーのアイベックス社に依頼した。

5) 登山料

インドの場合、以下のように登山料が決められている。
～21,000フィート 5,000Rs (22円×5,000)

21,000フィート～ 7,500Rs (22円×7,500)

6) 事務・通信費

現地での役所まわりに要した交通費や日本への電報代が主である。

7) その他

遠征の残金を報告書作成に充当した。

国外支出

1) 輸送費

デリーからガンゴトリまではバスをチャーターし、6,500Rsを要した。この交渉は代理店に依頼したが、相場より1,000Rsくらい安かった。ガンゴトリからデリーまでは、ジープや路線バスを利用し、かなり安くあげることができた。最後にデリーでガンディ首相暗殺事件に遭遇し、市内での移動にかなりの出費を余儀なくされた。

2) 装備費

ストーブ、石油代、バンパーなど。

3) 食糧

BC以下の食料はすべて現地で買い求めた。果物や缶詰などに意外と金がかかった。

4) ポーター等雇用費

ポーターは1人あたり31Rs/day, キッチンボーイは42Rs/dayで雇用し、さらに彼らのバス運賃も支払った。行きのキャラバンに44人、帰途は14人のポーターを雇用した。予定より多少多めの人数だったが、キャラバンも短く、幸いポーターとのトラブルも無く、予算内で充分おさめることができた。

5) 国外滞在費

隊荷の管理および隊員の食料のレベルの維持を優先し、あらかじめ1人1日100ルピーの予算を組んでいたが、最後はガンディ首相暗殺騒動のため、高級ホテルに缶詰め状態となり、結果的には1人1日140ルピーの出費になってしまった。

ご協力者芳名録

— 企 業 —

味の素株式会社札幌支店
味の素ゼネラルフーズ株式会社札幌支店
株式会社ICI石井スポーツ
カネボウ食品北海道販売株式会社
有限会社小林洋行北海道支社
株式会社秀岳荘
チトセツルサービスステーション
東邦キャンピングガス株式会社
帝国産業
株式会社トーマク
東洋水産株式会社札幌工場
日昌電材
日東電気工業株式会社
日本航空札幌支店
日本酸素株式会社
日本農産株式会社ヨード卵事業課
ハウス食品工業株式会社札幌支社

ホクセイ日軽家庭用品株式会社
ホクレン農業協同組合連合会
北海道梱包
北海道新聞社
北海道大学生協同組合
北海道文化放送株式会社
松下電器産業株式会社
丸味屋食品工業株式会社札幌出張所
三ツ和包装株式会社
雪印食品株式会社
雪印乳業株式会社北海道支社

— 個人(北大山の会々員) —

相 田 学	有 馬 純	池 上 宏 一
朝比奈 英 三	安 積 樟 三	井 沢 憲 文
東 信 彦	安 藤 久 男	石 井 清 一
鏝 邦 彦	安 間 荘	石 田 隆 雄
荒 生 繁 生	五十嵐 恒 夫	石 橋 恭 一 郎
有 波 敏 明	五十嵐 八 枝 子	石 松 重 雄

石	松	実	熊	野	純	男	関	沢	泰	治	西	安	信	藤	森	元	矢	作	栄	一
石	村	也	黒	川	章	武	高	篠	和	憲	西	信	三	伏	島	治	安	田	一	次
伊	明	克	小	泉	一	夫	高	田	敦	德	西	櫻	櫻	星	光	一	矢	野	一	実
井	紀	俊	小	枝	夫	正	高	田	寛	之	野	四	郎	本	敏	彦	山	縣	健	浩
井	孝	喜	越	野	正	郎	高	橋	一	總	野	虎	男	前	仁	一郎	山	口	健	児
伊	上	太	児	玉	郎	純	高	橋		剛	橋	本	敵	牧	博	恒	山	口	淳	一
今	良	之	小	西	年	隆	高	橋		仁	橋	本	正	増	幸	雄	山	口	信	男
今	孝	耕	小	林	一	陸	高	橋		浩	橋	本	芳	増	定	禪	山	崎	知	充
入	昌	博	小	林	重	一	高	松		彦	口	井	修	松	伊	智	山	田	真	弓
宇	真	理	宮	沢	重	正	高	田		雄	竹	忠	平	三	龍	民	大	和	正	次
上	格	生	山	山	正	晴	竹	山		世	立	準	晃	水	宜	一	湯	川	龍	二
越	八	郎	野	木	繁	雄	立	花		郎	谷	岡	行	源	治	元	吉	村	啓	一
遠	幸	一	坂	幸	郎	行	塚	口		司	戸	塚	秀	美	元	林	和	久	田	一
遠	一	一	佐	藤	行	二	戸	田		人	徳	井	郎	村	立	夫	渡	辺	良	一
岡	彦	夫	志	山	良	収	戸	永		雄	戸	井	弘	毛	夫	厚	渡	辺	興	之
岡	丈	夫	芝	水	二	二	富	田		明	富	永	二	森	立	平	渡	辺	真	勇
男	哲	晶	清	沢	英	行	内	藤		し	中	中	中	八	欣		吉	田	啓	一
小	俊	平	白	石	和	久	中	谷		拓	中	中	中	木	平		和	田	弘	一
小	雅	英	白	浜	晴	一	中	村		治	中	中	中	八	平		久	田	良	一
影	博	強	末	武	晋	夫	中	村		彦	中	中	中	村	博		渡	辺	興	之
神	男	男	杉	野	顯	浩	中	村		一	中	中	中	林	博		渡	辺	真	勇
神	夫	夫	杉	目	弘	泰	長	井		一	長	長	長	小	三		津	田	元	
菅	夫	夫	住	谷	俊	治	永	光		一	永	永	永	松	三		田	元		
北	夫	夫	関	関	和	人	名	越		一	名	名	名	後	三		田	元		
杏	敏	敏	関	関	裕	次	新	妻		博	西	西	西	富	徳		田	元		
工	啓	治	関	裕	次		西	信			西	西	西	富	徳		田	元		

—一個人(一般)—

赤須	之	太	田	充	子	富	川	敏	子
(東大スキー山岳部OB)	豊	大	塚	謙	一	永	田	東	一郎
阿部	豊	小	林	幸	治	神	尾	克	也
(北大W.V OB)	子	小	林	博	博	加	藤	峰	夫
石崎	敦	右	近	一	郎	津	田	元	
遠藤	郎	大	内	倫	文	津	田	元	
(北大W.V OB)	文	富	内	倫	文	津	田	元	

遠征隊留守本部

責任者 杉野目 浩

小林 年, 野田四郎, 芝山良二, 越前谷幸平,
下沢英二, 小泉章夫, 東 價彦, 志賀弘行

表 雅英, 松本伊智朗, 八木欣平, 菅野信夫 (東京支部),
毛利立夫 (東京支部), 入川真理 (東京支部)



L - 4
北大山岳館